

令和元年度 文科省

「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「セルフアドボカシー支援に向けた地域包括支援プログラム」

の開発と実施

本人講座「キープセーフ for チェンジ」

—私の人生、グッドウェイモデルで行くよ！—

《トラブルや人生の岐路に立っても、自分でグッドウェイを選択し、

意思決定していける『私』を磨く本人講座》の開発



特定非営利活動法人 PandA-J

「セルフアドボカシー支援に向けた学習プログラムに関する取組」

2019 年度報告書

令和元年度 文科省

「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「セルフアドボカシー支援に向けた地域包括支援プログラム」の開発と実施

本人講座「キープセーフ for チェンジ 私の人生、グッドウェイモデルで行くよ！」

特定非営利活動法人 PandA-J 代表理事 堀江まゆみ

事務局 〒187-8570 東京都小平市小川町 1-830

白梅学園大学 堀江研究室気付

TEL 042-313-4589 Mail info-panda-j@shiraume.ac.jp

本事業で開発したプログラム－1

1. 講座「私の人生、グッドウェイモデルで行くよ！」

トラブルや人生の岐路に立っても、自分でグッドウェイを選択し、
意思決定していける『私』を磨く本人講座

【 キープセーフ FC (for チェンジ) 】

(低・多リスク対応型本人向け学習プログラム)

－認知と意思決定スキルを獲得するグループ学習プログラム－

＜内容＞ 本人たちが「人生の岐路」（身近な悩みやトラブル、性問題行動など）に出会ったときでも、「自分にとってのグッドウェイ」を意思決定できるために、新しい認知とスキルを学習するプログラム。支援者たちの「人垣」の支えを得ながら、本人の希望やリスクに合わせて、以下の3ステップから学習を選択する。

第一ステップ 《暮らしの中の選択と自分で決める、を考える》



第二ステップ 《小さなトラブルでの岐路と意思決定ができる》



第三ステップ 《リスクのある本人とトラブル・性問題行動》

特徴； 親・支援者も共に学ぶことで、当事者を実践的意思決定主体として、再支援することを新しく位置付ける。

＜2019年度実施場所＞ 石狩、札幌、新潟、多摩、沖縄（5回～12回）実施。

低・汎リスク対応型本人向け学習プログラム

《キープセーフ for チェンジ》グループ学習プログラム

堀江 まゆみ ◎NPO 法人 PandA-J 代表 白梅学園大学教授

平井 威 ◎明星大学客員教授

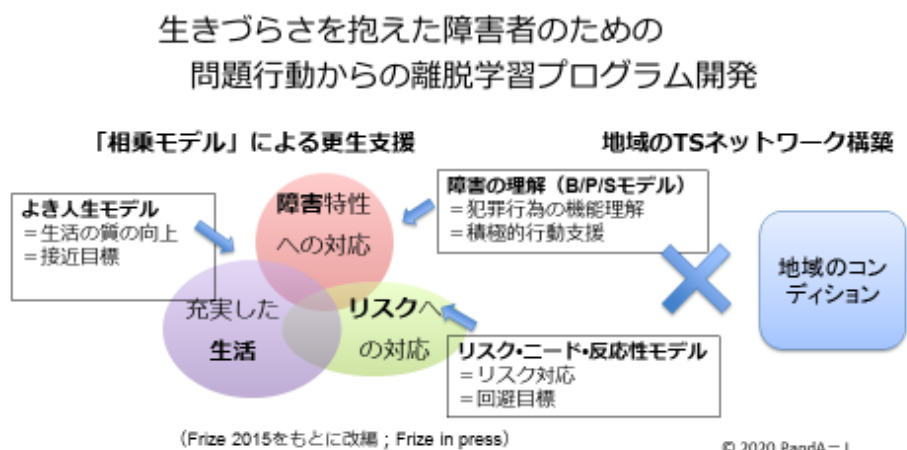
齊藤絵美子 ◎大妻多摩中学高等学校 公認心理師 臨床心理士

1. 《キープセーフ for チェンジ（以下、キープセーフ FC）》の必要性

《Keep Safe》は、性問題行動に特化したプログラムであり、当事者と保護者に対する週1回約1年半をかけた高密度で長期的な取組を必要とする。司法の制約を受けていたり、繰り返し問題を起こしていたりする当事者とその保護者への介入プログラムとしては当然の密度と期間である。《Keep Safe》を実施するために、以下の3点が前提となる。

- ① 参加する当事者の動機づけが重要
- ② 支援者が問題を把握することが前提
- ③ 地域に実施環境を整えて適切に支援できること

しかし、こうした前提が整わない・わからない（だからリスクがあるともいえる）という段階でも介入すべき事案は地域に存在する。性問題行動だけでなく、そのほかのトラブルやリスクのある当事者への支援が求められる場合もある。また、犯罪を犯したり性問題行動がある当事者だけではなく、犯罪やトラブルを起こしていない当事者向けの、数回で完結することも可能なプログラムへのニーズがある。さらに「週1回1年半のセッションを続ける体力が・・・」と二の足を踏むTSネットもある。こうしたニーズと制約から、低・汎リスク対応型本人向け学習プログラム《キープセーフFC》グループ学習プログラムが開発された。以下にこの考え方を図示する。グッドライフ・モデルと RNR・モデル及び生物心理社会モデルによる障害理解とその対応を組み合わせた「相乗モデル」と地域コンディションを掛け合わせて考えるというものである。



《Keep Safe》のもとになったニュージーランド発の「グッドウェイ・モデル」は、開発者の一人 L. Ayland によれば、以下6点の特長をもっている¹。

1. ニーズ対応：個人のニーズに合わせたプログラム
2. 生物心理社会モデルの介入：社会的および文化的背景を考慮し生活まると捉える
3. 発達のアプローチ：トラウマ、虐待、ネグレクトにも対処
4. 責任主体：メンバーは、他人の虐待や危害に対する責任がある
5. ストレングス基盤：メンバー、家族、システムの強みを重視
6. 汎用性：定型発達の子供や若者にも使用可能、知的障害のある成人にも適応可能

¹ L. Ayland (2017) The Good Way Model <https://www.psychology.org.nz/wp-content/uploads/Lesley-Ayland-The-good-way-model.pdf> (2020.2. 7 閲覧)

また、このプログラムの介入コンテキストとして示されている図は、私たちのTS ネットと同じ発想とってよい。

グッドウェイ・モデルの介入コンテキスト

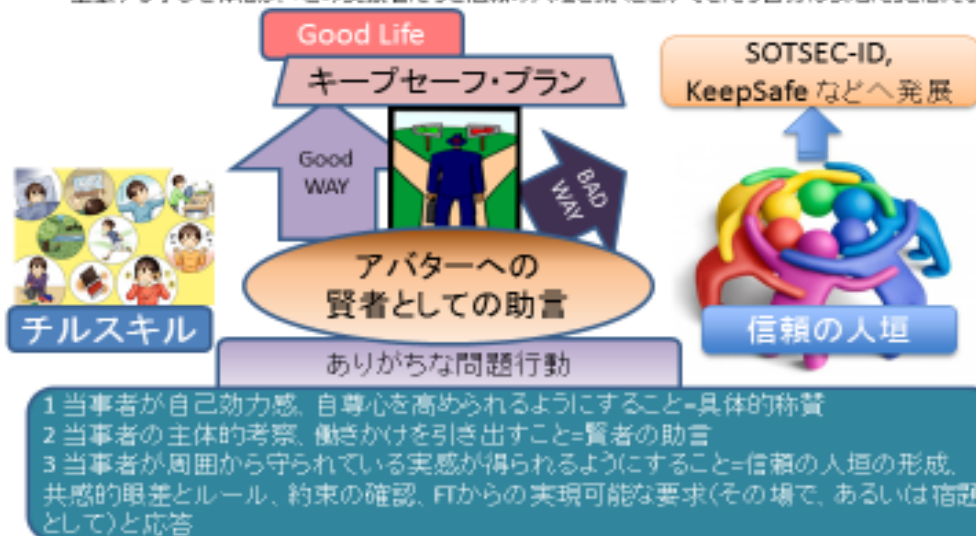


2. 《キープセーフFC》の目的、コンセプト

「相乗モデル」と地域コンディションを掛け合わせて、任意の回数と頻度で実施できるプログラムである。このプログラムを入り口にして、《Keep Safe》を実施するための3前提を整え、長期の介入に移行するゲートウェイと考えてもよい。この意味で「キープセーフ入門」とも言えるプログラムである。

セルフアドボカシー講座キープセーフforチェンジ（短・中期任意回数）

主張する学びを体感し、「この支援者たちと信頼の人垣を築くことができたなら自分は安心だ」と思えるような機会が作れるワーク



目的

1 《Keep Safe》のコンセプトを知る機会

2 共に学ぶ仲間、信頼できる支援者を発見し、変化へのアクションを起こす機会

3 親・支援者も共に学ぶことで、当事者を実践的意思決定者として再発見する機会とする

- 1 当事者が自己効力感、自尊心を高められるようにすること=具体的称賛
- 2 当事者の主体的考察、働きかけを引き出すこと=賢者の助言
- 3 当事者が周囲から守られている実感が得られるようにすること=信頼の人垣の形成、共感的眼差とルール、約束の確認、FTからの実現可能な要求(その場で、あるいは宿題として)と応答

目的

主張する学びを体感し、「この支援者たちと信頼の人垣を築くことができたならば自分は安心だ」と思えるような機会（以下三つの機会）が作れるワークである。

1. 《Keep Safe》のコンセプトを知る機会
2. 共に学ぶ仲間、信頼できる支援者を発見し、変化へのアクションを起こす機会
3. 親・支援者も共に学ぶことで、当事者を実践的意思決定者として再発見する機会

この講座の実施に当たっては毎回以下の内容を含めることが望まれる。

1. 当事者が自己効力感、自尊心を高められるようにすること=具体的称賛
2. 当事者の主体的考察、働きかけを引き出すこと=賢者の助言
3. 当事者が周囲から守られている実感が得られるようにすること=信頼の人垣の形成、共感的眼差とルール、約束の確認、FTからの実現可能な要求（その場で、あるいは宿題として）と応答

このプログラムは、従来のABCモデルを「思考・感情・行動」でまとめ、感情コントロールに重きを置く。そのためのチル・スキルをいくつか用意し習慣化を図る。

また

私の問題行動を理解するツールとして、架空のキャラクターや、バッドサイドの住人である3人の悪者とグッドサイドの声を演じる3人の賢者を登場させる。

悪者（卑劣、いじめ、衝動的） ⇔ 賢者（正直、良く考える、他人想い）

自分の問題行動をキャラクター（アバター）に託して演じることで、直面化による侵襲性を減じるとともにブリーフセラピーで言うところの「問題の外在化」（問題を外に出して客体化＝キャラ化し、それに対する対応策を考える）効果もある。これは従来の認知の歪みへの取組とリラプスプリベンションを合わせたような展開となる。

特に当事者が賢者となって架空キャラクター（アバター）にアドバイスするロールプレイは、「働きかけるものが働きかけられる」という教育原則にのっとった効果的な方法である。

3. 《キープセーフ FC》の展開（例）

1) 歓迎と紹介

アイスブレイクとお互いを知る



2) 私たちのグッドライフ

4ニーズ・グッドライフ・モデルを考える

全体グループで4ニーズのそれぞれに意見を出し



3) グッドウェイ PRO. とは何か

① グッドサイド/バッドサイド

② 分かれに道に立つ男の命名（アバターづくり）

③ グッドハウス/バッドハウス（信頼の人垣と波紋）について



4) 「分かれ道」に来たらどうするか？

- ① 色々な「分かれ道」を考える
- ② 「STOP・ステップ」を知る
- ③ チル・スキルを知る



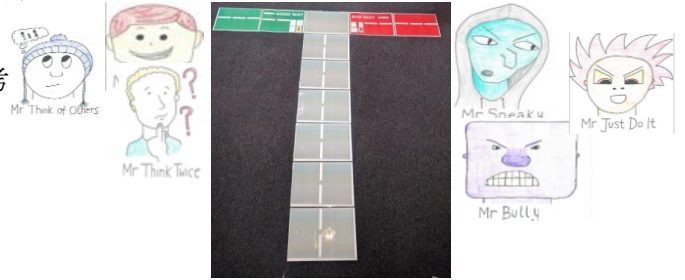
5) とある「分かれ道」で・・・

- ① バッドのささやきを考え3つに分類する

⇨三悪者の性格を知る

- ② グッド(三賢者)のアドバイスを考

⇨三賢者の徳性を知る



6) バッドとグッドのロールプレイ

バッド役はFT、グッド役はメンバー

7) 「分かれ道」の先にあるもの考える

- ① グッドハウス/バッドハウス
- ② 信頼の人垣
- ③ 波紋の広がり



波紋の広がり



信頼の人垣

8) 私のグッドライフ・プラン

- ① 4ニーズ・グッドライフ・プランを考える
- ② キープセーフ・プランを考える
- ③ 私のチル・スキルを考える

9) 振り返りと私の道具箱

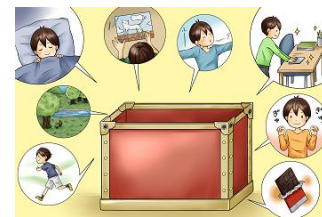
- ① 本日のセッションを振り返る
 - ・何がよかったですか、何が分かりましたか？
 - ・何が嫌でしたか、何が難しかったですか？
 - ・次回もっとよくすべきことは何かありますか？

未来のグッドライフ	
自立	健康
得意	関係

- ② 道具箱
- ③ アンケートの記入

10) チル・アクティビティ

チル・スキルの実践



4. 展開上の留意点

- ① とある「分かれ道」の問題をどう設定するか

メンバーのニーズに応じて、以下の3つのステージから問題を選ぶ。

原則として、第1ステージから始めて、メンバーのアセスメントが進み、課題が明確になるにしたがって第2、第3のステージに進めていく。

- 第1ステージ 日常の暮らしの中の「分かれ道」を探そうーグッドライフ/バッドライフ： 朝起きて仕事に行く、でも寝ていたい、どう考えるか。 ケーキが食べたい、でも太る。 ボーリングをやりたい、でもお金がない、など。

- 第2ステージ 社会生活の中での「分かれ道」を考える： 傘をさして自転車に乗るのは？ 乗っているとどうなる。 人の部屋に無断で入ったら？ 入るとどうなる、など。
- 第3ステージ 人生を左右する「分かれ道」で考える： 合意なく女の子を触ったら？、 他人の財布からお金を盗んだら？、など触法事例。
- ② 《キープセーフ for チェンジ》のゴールは、グッドウエイ・モデルによる「私のキープセーフ計画」＝個別の支援計画の一部を作ること！

キープセーフ for チェンジの学習者は、それを見守っていた支援者とともに自らの課題に気づきこれまでの支援計画を見直して「私のキープセーフ計画」を含む個別の支援計画を作る。「私のキープセーフ計画」の項目は以下で構成。

- I. 私のグッドな生活（4領域）
- II. 私のリスク
- III. 私のチルススキル（行動面のリラブスプリベンション）
- IV. 好きな賢者の声（認知面のリラブスプリベンション）
- V. 私の賢者（相談する人）

*自分の部屋に掲示できるようにラミネートを張ったポスターのように作成し各自に渡す、携帯できるカードなどにピクトグラムで表記するなど、いつでも参照できるよう工夫する。

③ チルススキル・チルアクティビティと問題解決スキルの例

右図のようなチルススキルを当事者に応じて幾つか用意して練習する。とっさに使える「呼吸法」や「筋弛緩法」は特に重視する。

問題解決のスキルは、認知行動療法における行動を変える方法や思考スキーマを変える方法からヒントを得ている。これらのスキルの習得には当事者に応じて繰り返しの

レクチャーや練習が必要かもしれない。また必ずしも一つの問題に一つのスキルが有効だというわけではなく、複数のスキルを組み合わせの方が効果的なこともある。ニーズとコンディションに応じて取捨選択するとともに、ロールプレイングなどアクティビティを工夫して繰り返し練習すると良い。





チルススキル・チルアクティビティ例



1. 気持ちを落ち着かせる呼吸法
 - ・静かに長く息を吐く
 - ・ラジオ体操の深呼吸
2. 簡単な筋肉弛緩
 - ・手のひらを握って開く
 - ・漸進的筋弛緩法
3. マインドフルネス
 - ・チョコレートのマインドフルネス
 - ・葉っぱのマインドフルネス
4. ビジュアルライゼーション

実施上のポイントは、「アドバイスのヒント」と書いてあるように、ファシリテーターが当事者に教え込むのではなく、“当事者がアバターにアドバイスする“ヒントとして示している点である。当事者がこうしたスキルを身に付けて架空のキャラクター(アバター)に自分の言葉や態度でアドバイスできるようになることが大切である。

問題解決のスキル1例

<p>アドバイスのヒント1 リラックススキル (緊急時用)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「心の停止ボタン」を作ろう！ 拳を握る、胸に手を置く、うなずく、などすぐにできる動作を「停止」ボタンに設定しておくともいいよ。 2 ふ〜と、長く息を吐く 3 両手の拳をぎゅっと力を入れて握って5秒える。そして手の平を、 4 目をつぶる 耳を押さえる 口を押さえる 	<p>アドバイスのヒント2 ストップ・ステップ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「心の停止ボタン」を押して、立ち止まろう。 2 そしてリラックスしよう。どのリラックススキルを使うかな→ヒント1参照 3 他のもっと良いことを考える 4 他の方がいい方向へ行く。別の活動をする。
<p>アドバイスのヒント4 「その後、どうなる？」と考えるクセをつけよう</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 何かしたら(行動と言います)必ず、その後何が起こります(結果と言います) 行動→結果 2 その結果はあなたの人生にとって良い方向につながるでしょうか？それとも悪い方向にあなたを引き連れていくものでしょうか？ 3 「結果」は、また次の「行動」につながったり、前と同じ「行動」を呼び出したりします。 4 だから、行動する前に、「その後、どうなる？」と考えるクセを身につけましょう。  	<p>アドバイスのヒント5 感情の表情と名前、感情メーター</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 人には8つの基本感情(気持ち:怒った、怖れ、喜ぶ、びっくり、嬉しい、悲しい、いいね、やだね)とそれらが組み合わさったたくさんの感情があります。 2 どんな時、どんな気持ちになりますか？その時どうい表情をしますか？ 3 他の方の感情を知るにはどうしたら良いでしょうか？ 4 感情には「強さ」があります。「感情メーター」はそれを見る(計って)くれます。 
<p>アドバイスのヒント3 誰かの血が流</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 これをしたら、誰がこのことを知るでしょうか？ 思いつづけた人の名前を挙げてみましょう。親、きょうだい、友だち、仕事場の人、近所の人、警察官… 2 1で挙げた人々は、それを知ってどう思うでしょうか？ 3 1で挙げた人々は、その後どんなことをするでしょうか？ 4 2、3で考えた人々の思いとすることについて、あなたは何を思いますか？ 	<p>© 2020 PandAーJ</p>

5. 《キープセーフ for チェンジ》を実施する環境整備とリスク管理

1. 地域のトラブル・シューター (TS) ネットワークの構築

支援者ネットワークは地域の実情に応じて構築されるが、福祉・医療・司法・教育などの専門家と志のある個人や機関が参画することが望ましい。またコアとなる人財の決意と態度が重要である。

2. ファシリテーター養成 (FT の要件)

《キープセーフ for チェンジ》は、「Keep Safe」のコンセプトをもとに開発されたプログラムなので、FT は、「Keep Safe」の知見を有していることが望ましい。

「Keep Safe 二日間講習」を受け認定証をもつ者、或いは「キープセーフ for チェンジ4時間研修」を受け FT 実施者として認められた者1名以上を含む3名以上の「コ・ワーカー」で実施するものとする。

3. リスクアセスメントの実施とリスクマネジメント

参加メンバーは、地域 TS ネットワーク参画者の「人垣」によって守られていなければならない。ネットワーク支援者と関係のあるメンバーによって構成されることが望ましい。また参加にあたってリスクアセスメント(後述)を実施するとともに、必要なリスクマネジメントを行う必要がある。

4. 倫理的配慮と研究の共有

参加メンバーは、過去に犯歴にある者も含まれる可能性がある。そうでなくても、

本講座では個人の趣向や嗜癖等を含む個人情報やり取りされることから、参加にあたっての当事者（必要に応じて保護者等）の承諾と FT の倫理誓約を明記した文書を交わす必要がある。

また、本講座は NPO 法人 PandA-J が受託した文部科学省「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業として行われるため、必要な情報の共有と共同研究規約の順守が求められる。

* 《キープセーフ for チェンジ》リスクアセスメント（簡易スクリーニング用紙）

【キープセーフ for チェンジ リスク・アセスメント（持続的本人項目：当てはまるものに○）】 対象本人							さん（年齢	歳）
①項目	質問	《リスク大》	《リスク小》	《保護因子小》	《保護因子大》	エピソード		
①規則へのコンプライアンス	学校や職場等規則やルールを守ろうとするか？	規則を守らないことがよくある	規則を守らないことが時々ある	だいたい規則は守っている。	規則やルールをよく守る			
②学習へのコンプライアンス	学習によって今よりもいい自分になりたいと思うか	まったく今よりもいい自分になりたいと思わない	あまり今よりもいい自分になりたいと思わない	少しはいい自分になりたいと思っている	かなりいい自分になりたいと思っている			
③トラブル経験とその程度	今までになにかトラブル経験があるか	たくさんトラブル経験がある	時々トラブル経験をしてきた	ほとんどトラブル経験はない	今までトラブル経験はない			
④トラブルのコントロール	トラブルを起こさないために自己調整できるか	トラブルの自己調整が全くできない。	トラブルの自己調整がほとんどできない	少しはトラブルの自己調整ができる	かなりトラブルの自己調整はできる			
⑤衝動・感情コーピング能力	衝動性が高いか、感情の調整ができるか	かなり衝動性が高い、感情の調整ができない	少し衝動性が高い、あまり感情の調整ができない	だいたい衝動性は低い、感情の調整ができる	衝動性はなく、かなり感情の調整ができる			
⑥対人関係	友だち関係や大人との関係があるか関係が断れるか	まったく友だち関係や大人との関係がとれない	あまり友だち関係や大人との関係がとれない	だいたい友だち関係や大人との関係がとれる	かなり友だち関係や大人との関係がとれる			
⑦個別の考慮	特記すること	かなりある	少しはある	あまりない	全くない			
合計項目数	—	/7	/7	/7	/7			

リスクアセスメント結果

↓ (一番多いもの○、次に多いもの○)

《リスク大》	《リスク小》	《保護因子小》	《保護因子大》
--------	--------	---------	---------

危機介入プログラム選定

SOTSEC-IDか KeepSafe（長期）が望ましい	キープセーフ for チェンジが望ましい
------------------------------	----------------------

コメント

本事業で開発したプログラムー2

2. 講座「性問題行動性問題行動のある思春期・青年期の知的障害者とその保護者を対象とした

《Keep Safe》プログラム」

(中・高リスク対応型本人向け学習プログラム)

＜内容＞ 《Keep Safe》の目的、コンセプト

目的は次の2つに焦点を当てている

1. ウェルビーイングの向上（ニーズを、社会に適応した方法で満たす）
2. 再犯に至るリスクの低下（ニーズを、性加害や他の不適切な方法で満たさない）
次の主要モデルに準拠している。

- ・ 認知行動療法に基づいた支援
- ・ 保護者とのワーク

性問題行動のある思春期・青年期の知的障害者とその保護者を 対象とした《Keep Safe》プログラム

◎堀江 まゆみ NPO 法人 PandA-J 代表 白梅学園大学教授

◎平井 威 明星大学客員教授

◎齊藤絵美子 大妻多摩中学高等学校 公認心理師 臨床心理士

1 《Keep Safe》の目的、コンセプト

目的は次の2つに焦点を当てている

1. ウェルビーイングの向上（ニーズを、社会に適応した方法で満たす）
2. 再犯に至るリスクの低下（ニーズを、性加害や他の不適切な方法で満たさない）
次の主要モデルに準拠している。

- ・ 認知行動療法に基づいた支援
- ・ 保護者とのワーク

性問題行動が発覚して、悲しみや衝撃、自責の念、非難の気持ちを感じた家族のトラウマを、コントロールすることの支援。家族は十分な安全計画を作れること、適切な水準の監督ができることの確認。保護者に、性問題行動のコントロール方法や、進

行中のリスクに気づいて対処する戦略を教える。役に立たない保護者の行動に言及し、保護者の思い込みについて吟味する。当事者等の安全を維持する能力を低下させるような保護者自身の生活上の問題に言及する。

さらに、性問題行動に関する保護者の否認や、家族メンバー間で結託するなどの共謀に対処する。説明責任が果たされ、支援やモチベーションが得られる環境を築き、維持する。保護者の性加害／性虐待行動に対する理解度を探り、当事者のもつ視点の理解を図る。現在進行中の心配事に言及し、長所や粘り強さの要素を高める。保護者のプログラムに対する理解を図り、当事者のプログラム参加をよりよく支援できるように、保護者自身が適切・不適切な性行動について理解する。とくにきょうだい間の虐待の状況について、家族関係を再構築する（修復的实践）

・グッドライフ・モデル

Ward らの「グッドライフ・モデル」は以下を示唆している。

性問題行動を示す者は、内的リソース（スキルや態度）と外的リソース（社会資源、社会的支援など）に欠けるために、基本的ニーズを性加害という方法によって満たそうとした結果である。支援は、これらの内的・外的リソースを強化することに焦点を当て、そうしたニーズや目標を達成するための向社会的な方法がとれるようにする。それにより性加害の再犯に至るリスクを統制することを目的としている。

グッドライフ・モデルは、他のモデル、とくに「リスク-ニード-応答性モデル」(RNRモデル)との類似点と相違点が盛んに議論されている。RNRモデルによれば、効果的な犯罪者処遇を行うためには以下の3つが重要であるとしている。①Risk: 再犯リスクの高低に応じた密度、②Need: 再犯に結びつく要因に焦点を当てる、③Responsivity: 認知行動療法に基づき、本人の学習スタイル、モチベーション、ストレングス（長所、強み）に対応した応答性の高い方法を採用する。

・グッドウェイ・モデル

グッドウェイ・モデルは、1990年代後半にニュージーランドの「Wellstop」サービス（性暴力を犯した知的障害のある青少年の支援サービス）において、Ayland たちによって、当初、クライアントとのコミュニケーションをとるために開発された。知的障害のあるクライアントの言語やコンセプトを聴き、それに合わせて支援の枠組みを適合させ開発された。グッドウェイ・モデルは、発達、アタッチメント、トラウマの問題、さらに認知行動療法、関係者の共通理解、文脈フレームワーク（contextual frameworks）の理論を統合・総合した取り組み。ナラティブを使い、自分の考えや感情を把握し、それを1本のストーリーとして再構築できるようにする。

グッドウェイ・モデルの6つの構成要素：

1. クライアントの行動の問題を「生物心理社会モデル」(bio-psycho-social

model) に基づき、生活全体をホリスティックにとらえる。同時に本人とその家族がもつ資質やストレンクス（長所、強み）に注目する。

2. クライエントの思考・信念・価値感に関するグッドサイド/バッドサイド（よい面/悪い面）の違いを対比させ、概念をわかりやすくする。
3. グッドウェイ/バッドウェイ（よい方法/悪い方法）はクライエントが行動と結果のつながりを理解し、意思決定や問題解決スキルの促進、自己の有害行動や問題行動の再発を防止する。アセスメントで明らかになったニーズを満たすための別の方法（例：感情統制、アンガーマネジメント、沈静化技法）を学ぶと同時に、強み（たとえば責任をとる、自立など）を養う。



4. 「意思決定」において、日常的に「グッドウェイ」（よい方法）で物事を行うことによって、人生において、暴力のない生き方にコミットすることである。
5. グッドウェイ・モデルの中に、「グッドハウス/バッドハウス」の見方がある。以下の視点から自分のいまの行動を考える。

I. 家族の関係性・仲間関係は自分にどう影響しているのか

II. 人生の出来事は、自分の「今」にどのように影響しているか



こうした問題を扱う目的は、クライエントが、自分の思考・感情・行動・価値観・脆弱性・ストレンクスがどのように形成されたかを理解することを助け、自分のよい面/悪い面に関連づけ、自らの加害に直面し、自らの思考、態度、行動を適切なものに変えていくために、「こうなりたい」という目標にたどりつくための新しい物の見方を探す。

さらにグッドハウス/バッドハウス・モデルの他の部分では以下も扱う：

III. 自 分 の 問 題 行 動 は 周 囲 の 人 に だ う 影 響 す る か

IV. 自 分 が 他 人 に や さ し く す る こ と で 、 他 人 と の 関 係 を 強 く す る こ と が で き る と 気 づ く 。

6. 「私のキープセーフ計画」は上記の治療のプロセスのまとめとなる
- I. 振り返り（例：過去の自分、私は何を学んだか、いま私は何を知っているか）
 - II. 将来について考える（私は何を求めるか、何を避けたいか）

2. 《Keep Safe》の対象者、実施方法、アセスメント、セッション構造

参加者選定基準は、男性、プログラム開始時の年齢は12～17歳だが、おおむね30歳未満までとする。知的障害 - IQ 相当値 50～70 および社会性の障害がある、性問題行動のために保護観察等刑事司法制度下に置かれている人もいるが、これが参加に必須の基準ではない。

さらに「キープセーフ Group 治療の適合性」のスクリーニングを経ていること、キープセーフに参加する保護者/支援者がいること（地域TSベースで行う）である。

キープセーフは、集団による支援を意図している。ファシリテーターは、少なくとも2名男女で対応。ファシリテーターは二日間の研修を受けることが必須である。

グループへの参加・実施前と経過中、事後に行うアセスメント等は以下のとおりである。

- ・ 参加時： 参加申し込み書（基本情報含む）、簡易スクリーニング用紙（堀江作成版）
 - ・ 上記2点をTSネットFTグループで精査し、参加に適切かどうか決定する。
 - ・ 事前： アルマジロS(継続的C&E)、性知識と態度尺度、その他既存の尺度(WISC, Vineland等) 必要に応じて参照
 - ・ 経過： アルマジロS(短期的C&E)、毎回の当事者/保護者アンケート、ポートフォリオ、観察記録、FT評価
 - ・ 事後： アルマジロS(継続的・短期的再評価)、目標達成度評価、当事者/保護者アンケート
- セッション構造は、1回2時間、週1回で実施することを標準に、途中15分～20分のおやつ付き休憩をはさんで以下の流れで行う。
- ・ 歓迎と予定
 - ・ 一週間の振り返り（うまくやれたこと/できなかったこと、使ったチルスキル、宿題の発表など）
 - ・ 前週の復習
 - ・ 新しい内容の理解、演習、練習
 - ・ チルスキル（リラックス）、宿題、振り返り

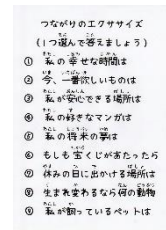
3. 《Keep Safe》のモジュール構成（当事者6モジュール38セッション、保護者



モジュール7：16セッション)と主要教材画像²

● モジュール1: キープセーフとはどのようなプログラムか? 開始にあたって

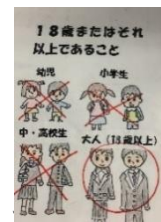
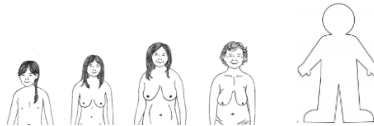
- ・はじめに キープセーフ開始にあたって 解説
- ・S1: キープセーフとは何か、歓迎と導入
- ・S2: グループを知ろう
- ・S3: 「各人のグッドライフ・モデル」導入
- ・S4: 「グッドライフ」「グッドサイド」「グッドウェイ」



- 性のビッグルール
- 12人とも16歳以上であること
 - 16歳未満の子供を誘ったり、誘われることは絶対にしないこと
 - オンラインで知り合った人と会ったりしないこと
 - 同意してはいけません
 - 3人以上は誘ったり、誘われることは絶対にしないこと。グループは、必ず16歳以上の大人の監督が必要です
 - オンラインで知り合った人と会ったりしないこと。必ず16歳以上の大人の監督が必要です
 - 16歳未満の子供を誘ったり、誘われることは絶対にしないこと

● モジュール2: 成長:関係性, 性的関係と境界

- ・S1: 私たちの体
- ・S2: 成長
- ・S3: 友だち、家族、恋人
- ・S4: 関係性: 恋人関係
- ・S5: モジュールの復習
- ・S6: 同意
- ・S7: 良いタッチと悪いタッチ、その結果 (その後何が起こる?)
- ・S8: セックス、子どもをつくるということ、子どもをつくらないということ
感染症と性の健康
- ・S9: ソーシャルメディア、インターネット、同調圧力
- ・S10: ソーシャルメディア、インターネット、同調圧力: 結果 (その後何が起こるか?)



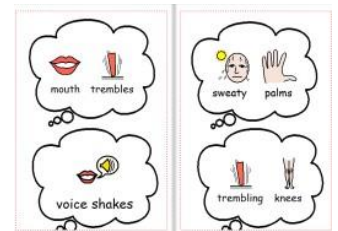
● モジュール3: 感情と感情のコントロール

- ・S1: どんな気持ちかな
- ・S2: 感情と私たちの体
- ・S3: 思考と感情を関連づける
- ・S4: 思考と感情と行動を関連づける
- ・S5: 責任者は誰なのか? 自分か感情か?
- ・S6: 私のクールダウン計画

キープセーフ モジュール3 当事者セッション
感情と感情のコントロールSTOPステップ

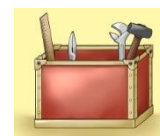


- STOPステップの流れ:
1. ストップ - 停止ボタンを押す
 2. リラックス - どのチルスキルを使うか
 3. 考える - より良い選択 - 自分の部屋に行く、違う活動をする、外に行く
 4. 行う - 違う活動を選び、グッドウェイに行く



● モジュール4: 自分の行動を理解する

- ・S1: グッドウェイモデル:グッドサイド/バッドサイドの復習
- ・S2: グッドウェイモデルと3人の悪者 (Mr. 最低な奴) を紹介する
- ・S3: 3人の悪者 (Mr. 最低な奴) と私の性問題行動
- ・S4: 3人の悪者 (と Mr. 最低な奴 悪い奴) と謝罪
- ・S5: 3人の賢人 (又は安全な人) を紹介する。
- ・S6: 自分のグッドサイドを強くする



● モジュール5: 共感と結末の予測 (その後何が起こるか?)

² ここに例示してある画像類は、英語版マニュアルを翻訳したものと本邦での試行実践で使用したものが混在している。

本事業を全国各地で実施するための基盤構築 —各地TSをコアとした地域連携協議会の連携

知的障害・発達障害のある人の生涯学習支援のあり方と

「キープセーフ for チェンジャー自分の人生、グッドウェイで行くよ！」《セルフアドボカシー支援プログラム》実施基盤構築

堀江 まゆみ ©NPO 法人 PandA-J 代表 白梅学園大学教授

1. 《Keep Safe》および「キープセーフ FC」プログラム実施のためのファシリテーター養成と地域包括支援のための基盤構築

本人たちのための生涯学習の実践とは、全国各地の知的障害・発達障害のある本人が、身近な地域で、身近な支援者たちと共同でセルフアドボカシー支援を作り上げることが重要であると考えている。

そこで、本事業では、本法人（特定非営利活動法人 PandA-J）が過去 10 年間にわたりつがってきた「各地のトラブルシューター（TS）ネット」を基盤にして、生涯学習に関心のある諸機関をコーディネートする形で実施基盤を構築してきた。全国各地では、それぞれの地域で有効な社会資源（強味のある機関）は異なってくる。各地のコアTSが中心になり、自立支援協議会、発達障害者支援センター、基幹相談支援センター、地域生活定着支援センター、特別支援学校、児童相談所、行政などをつなぎながら各地の地域連携協議会を立ちあげることとした。

昨年度は、4 地区で支援者講座を実施し、学習プログラムを実施できる支援者を 278 名養成し、かつ、各地の調整を行うコーディネーターを 39 名養成したが、今年度はさらに、青森 東京武蔵野・杉並 静岡 滋賀 福岡 熊本 鹿児島・奄美などで TS 基礎講座や支援者養成講座を実施した。

《Keep Safe》正規インストラクター養成研修を①2020 年 2 月 27 日、28 日福岡市にて、②2020 年 3 月 3 日、4 日東京都内にて開催した。「キープセーフ FC」のインストラクター養成セミナーを 2020 年 3 月 8 日に東京にて開催した。

また、各地連携協議会の整備とともに、全国の TS ネットワークをつなぎ、情報共有と共同研究をすすめるための全国 TS ネットワーク体制の整備に力を入れた。各地に責任を負う担当者の設定や実施基準の策定なのである。これにより《Keep Safe》およ

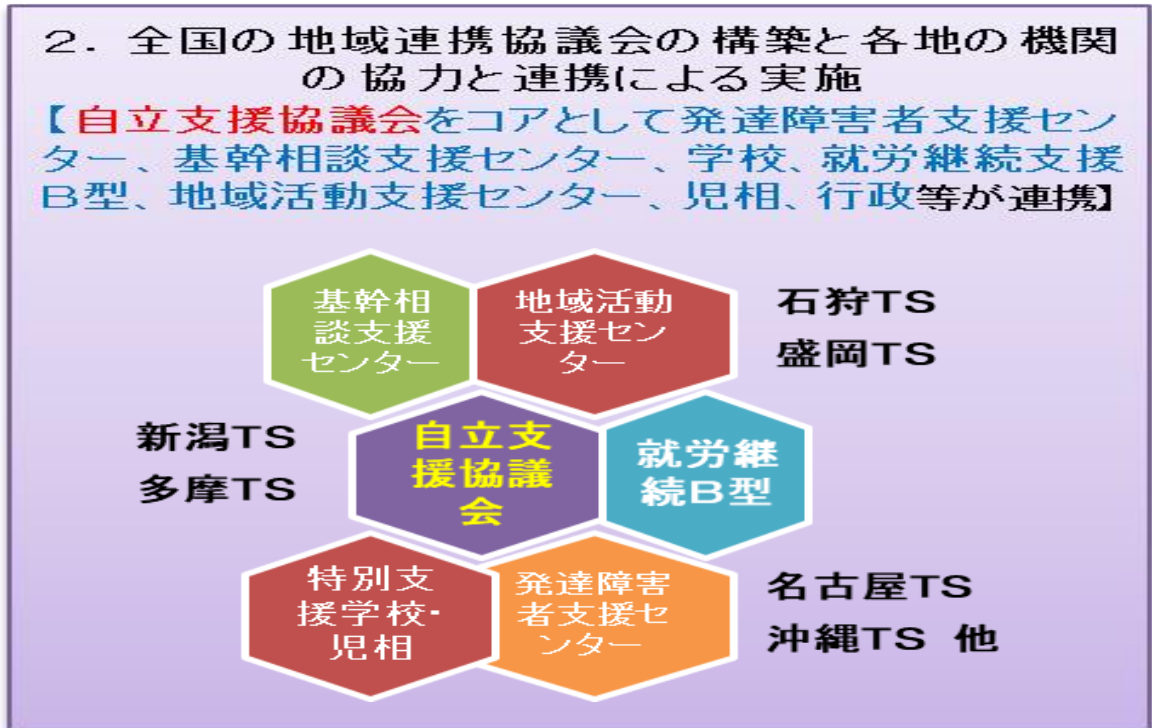
び「キープセーフFC」プログラムの正確かつ効果的な実施が担保される。

また、各地連携協議会の整備とともに、全国のTSネットワークをつなぎ、情報共有と共同研究をすすめるための全国TSネットワーク体制の整備に力を入れた。

全国各地の地域連携協議会は、以下のように連携して実施にあたった。自立支援協議会との連携を現在、各地で進めているところである（*準備が進むTS）。

全国ブロックTS 全国地域連携協議会	ブロックTSの構成	主なコア機関
北海道ブロックTS 地域連携協議会	石狩TS *札幌TS	社会福祉法人 地域活動支援センター 相談支援事業所
東北ブロックTS 地域連携協議会	盛岡TS 仙台TS *青森TS	発達障害者支援センター 地域生活定着支援センター 相談支援事業所 法テラス、弁護士、他
甲信越北陸中部ブロックTS 地域連携協議会	新潟TS 滋賀TS *石川TS *富山TS	基幹相談支援センター 相談支援事業所 地域活動支援センター 地域生活定着支援センター グループホーム支援者 自立支援協議会、他
関東東海ブロックTS 地域連携協議会	東京多摩TS 東京武蔵野TS 東京杉並TS *静岡TS	就労継続支援B型事業所 特別支援学校教員 障害者支援施設 グループホーム支援者 矯正施設支援者、 自立支援協議会、他
四国関西ブロックTS 地域連携協議会	香川TS 徳島TS *広島TS	発達障害者支援センター 基幹相談支援センター 大学教員 グループホーム支援者、他
九州沖縄ブロックTS 地域連携協議会	沖縄TS 熊本TS 奄美TS *福岡TS *大分TS	発達障害者支援センター 大学教員 児童発達支援事業所 就労継続支援B型 自立支援施設 他

全国TSネットワーク（全国地域連携協議会）とは、各地に責任を負う担当者の設定や実施基準の策定なのである。これにより《Keep Safe》および「キープセーフFC」プログラムの正確かつ効果的な実施が担保される。



本年度の全体活動とその成果

—各地の実践と地域連携協議会の連携から

堀江 まゆみ ©NPO 法人 PandA-J 代表 白梅学園大学教授

1. 前年度の到達点

NPO 法人 PandA-J が 2011 年から取り組んできた英国自閉症協会 (N A S)、ケント大学障害者センター (Tizard Centre)、NGO プリズン・リフォーム・トラストなどの研究者との共同研究は、触法リスクのある知的障害や発達障害のある人々を地域で支え更生にいきなうための基盤としての地域トラブルシューター・ネットワーク (TS ネット) づくりと当事者に向けた再犯防止プログラムの提供という課題を浮き彫りにしてきた。

そこから、全国各地で啓発的セミナーを行い、北は北海道石狩市から南は沖縄県石垣市まで各地に数十の TS ネットを作り出すことに貢献してきた一方、2015 年度東京都多摩地区と、2016 年度～2017 年度新潟市において、性犯罪リスクのある知的障害者向けの認知行動療法である SOTSEC-ID の当事者向けセッションを行った³。

この成果を発展させるべく、各地に生まれた TS ネットにおける当事者支援機能を高めるための基盤整備と、性問題行動に限らず多様なリスクを伴う知的・発達症青少年向けとして有効なグッドライフ・モデルにもとづくプログラム開発を意図して本研究事業委託を受けた。

初年度にあたる平成 30 年度は、以下のような成果を上げた。

- 1) 各地の TS ネットで地域包括的支援を構築していく教員、福祉支援者、その他保健・医療、司法の関係者や地域住民などを共生社会の構築にまき込んでいくことができ、当事者プログラムのためのコーディネーターを全国で約 40 人程度養成することができた。
- 2) 既存の「暮らしのルールブック」を用いた低リスク者向け講座を開催した経験から、新たな「知的障害・発達障害のある人のセルフ・アドボカシー学習支援プログラム」を作成する準備が整ってきた。
- 3) SOTSEC-ID の青少年向けプログラムとして開発された《Keep Safe》が、知行動療法をベースとしながらも、知的障害や発達障害のある青年が理解しやすく、彼

³ 文科科研 15K04153「知的・発達障害者の性犯罪再犯防止 S O T S E C - I D - 認知行動療法と地域包括支援」研究代表者 堀江 まゆみ (2015 - 2018)

らのレジリエンスを高められるプログラムであることが分かった。

2. 令和元年度（本委託研究二年次）の成果 1

性問題リスク対応型学習プログラム《Keep Safe》(yS O T S E C - I D) の日本における試行—2 か所にて展開

性問題行動を有する青少年と保護者に向けたグループ学習プログラム（英国ケント大学 R. Rossiter 博士との共同研究）《Keep Safe》の我が国における初めての当事者セッションに着手した。

前年度から実施準備を進めてきた、名古屋市児童相談所と福祉型知的障害児施設との協働による10代の青年4名を対象とした週1回、全38回のセッション（2019年5月から2020年3月まで）と、盛岡・仙台TSを基盤とした岩手県発達障がい者支援センターを核とした10代～20代青年3名を対象とした隔週1回、全18回のセッション（2019年6月から2020年3月まで）を実施した。（それぞれの詳細は、各報告に譲る）

名古屋の実践は全国の児童相談所の注目を集め、児童保護の専門機関である児童相談所や養護施設等で生活する知的・発達の制約のある子どもの性問題行動への介入方略として、《Keep Safe》導入への期待が高まっている。

盛岡の実践は、地域の関係機関が協働し地域ベースで性問題行動のある青少年に生涯学習機会を与えることの意義と可能性を一層明らかにした。

3. 令和元年度（本委託研究二年次）の成果 2

低・多リスク対応セルフアドボカシー支援学習プログラム「キープセーフ for チェンジ」の開発と当事者セッションの開催—5 か所で実施

昨年度展開した「暮らしのルールブック」講座の成果と課題を精査する中で、「犯罪事典」としての性格をもつ「暮らしのルールブック」を使った学習では、当事者に安易な問題への直面化を迫ることで、1. 人に言われた事には従う（迎合性を高める）2. ダメだと言われたら、考えなくなる・相談しなくなる（思考の一時停止）3. 誰にもわからなかったら「これくらいでもいいだろう」（行為の隠蔽へ）とってしまうというリスクがあることが分かった。問題行動を起こす人は、「ありのままの自分」ではいけないというメッセージをたくさんもらってきた人⁴ という指摘もあり、現在の問題行動改善方略のトレンドがグッドライフ・モデル（モデルストレングスを伸ばし、ニーズをより適応的に満たせるような生き方を選びとるように導くアプローチ）であることを考慮すると、「より良く生きる意欲を喚起し、主体的な活動を引き出す学びと生活を作り出すこと」という一般的な教育原則に従う学びを作り出すことこそ、この分野においても大事であることが確認された。

⁴ 岡本茂樹、『反省させると犯罪者になります』（2013）新潮文庫

そこで、我々が開発するセルフアドボカシー支援学習プログラムの条件と目標を次のように設定し、《Keep Safe》のグッドウエイ・モデルを性問題だけでなく汎用性のある多・低リスク対応プログラムとして構成し、「キープセーフ for チェンジ」とし開発した。

問題行動のある人が、自分の問題と向き合い真っ当な生き方を選択するようになるためには少なくとも次の3点が前提。

- 1) 自分にも豊かな人生が切り開けると言う「将来への希望」
- 2) ありのままの自分が他人に受け入れられるという「受容的体験」
- 3) 誰かの役に立ち誰かに喜ばれるという「愛他的経験」

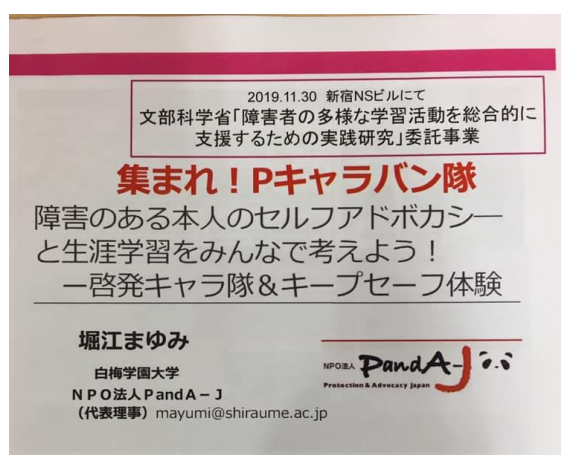
そしてようやく、問題を改善するための具体的スキルを身につける努力が始まる。

目標は、やらされることより自らやることの育成、すでにある自分の受容と感情を表現する自律性の獲得である。そのために効果的な関わり方と眼差しは、褒める・共感する・暖かく接する・見通しを持たせる・励ますことであり、「本当のあなたのままで良い」と言う人生への共感と小さな変化への気づきが担当者には求められる。良いグループの特徴は、凝集性（支持的・相互尊敬）、表現性（話すこと、感情的自由）にある⁵（プログラムの詳細は、別項に譲る）。

本年度の実施は、以下のとおり。

- 1) 新潟市障がい者地域自立支援協議会相談支援連絡会権利擁護班の年間活動方針の柱の一つとして地域活動支援センターを会場として実施された14回連続講座
- 2) 石狩市・札幌市における3つのグループでの計9回の講座
- 3) 多摩TS（国立市）における障害者就労支援B型事業所を会場とした4回連続講座
- 4) 沖縄市におけるグループホーム利用者向け5回連続講座

4. 令和元年度（本委託研究二年次）の成果4



⁵ Irvin D. Yalom 著 中久喜雅文・川室優監訳（2012）『ヤーロム グループサイコセラピーの理論と実践』、西村書店

障害理解啓発のためのキャラバン隊（通称 P キャラ隊）フェスティバル 2019 を開催し、親のちからで、キープセーフのポリシーを各地に伝える態勢を作り出した
従来から、学校や地域に障がい者理解を寸劇等で伝えてきた各地の「キャラバン隊」（7 団体）の皆さんに集ってもらい、11 月 30 日新宿にて約 50 名の参加者で開催した。

北海道ブロック地域連携協議会—石狩 TS

石狩トラブルシューターネットワークの活動

-
- ◎金子 浩治 社会福祉法人 はるにれの里 法人役P&Aいしかり
◎野田 宏 地域活動支援センターえみな 石狩大地の会事務局
◎俵谷 知美 地域活動支援センターアンナプルナ
角田 大輔 社会福祉法人はるにれの里 生活介護事業所「あらいぶ」所長 ・
P&Aいしかり世話人 ”
福地 充江 社会福祉法人はるにれの里 石狩地域活動支援センター「えみな」
支援員
本郷 和章 社会福祉法人はるにれの里 生活介護事業所「ぼぬーる」所長
平松 浩樹 社会福祉法人はるにれの里 石狩市相談支援センター「ぶろっぷ」課
長 相談専門員
-

はじめに

石狩トラブルシューターネットワーク（以下、石狩TS）は、平成28年3月に「トラブルシューター支援者養成研修がP&Aいしかりの主催で開催され、それを機に石狩TSができた。その母体となる「P&Aいしかり」は「障がいのある人のための権利擁護と地域でのセーフティーネットづくりを！」草の根運動的に進めていこうということで、平成22年10月設立準備会が発足し、平成24年12月に準備会から正式に「P&Aいしかり」が結成された。構成はNPO法人石狩市手をつなぐ育成会、石狩市障がい者支援センター保護者会、社会福祉法人はるにれの里からなっている。

障がい児・者が地域で生活する上で、様々の生きづらさがあり、障がい児・者への理解が地域に浸透していないことから、誤解や偏見などによるトラブルが生まれてしまう。街中では時おり、知的や自閉症の障がい児・者は物事を理解したり、表現することが苦手なために、「不審者」に間違えられたり、「犯罪者」にされたり、逆にトラブルに巻き込まれ、被害者になることもある。私たちP&Aいしかりは地域の中に彼らの良き理解者・サポーターを広げる活動をしてきて9年になる。この間、P&A大阪で作成したコンビニ向けパンフレット等を活用して、毎年市内のコンビニ・スーパーにサポーター店の依頼活動をおこなっている。その際に何かトラブルや困ったことがないか聞き取り活動もおこなっている。その他、地域課題を取り上げ、共に考える集いや各種の取り組みをおこなってきた。（活動詳細は、P&Aいしかりホームページに掲載<https://p-a-i-shi-kari.jimdofree.com/>）

セルフアドボカシー当事者向け講座実施にあたって

石狩TSで「暮らしのルール・セルフアドボカシー当事者向け講座」をおこなうにあたって、

1. 石狩大地の会向け講座

(石狩大地の会役員会の主に知的障がい当事者向け)

2. 地域活動支援センターえみな

(石狩) 講座 (地活プログラムに定期参加している主に知的障がい当事者向け)

3. 地域活動支援センターアンナブルナ

(札幌) 講座 (当事者研究に関わる発達障がい当事者向け)

これら3つのグループを対象に進めていくこととした。尚、1の当事者会は地域活動支援センターえみな(石狩)に事務局があり、毎月役員会がおこなわれている。

講座を進めていく上で、第1回支援スタッフ会議(10月1日地域協議会)石狩大地の会では、本年9月に開催された当事者の人権セミナー実行委員にも加わっており、人権セミナー内容なども含めて考えようということでも検討してきた。身近な暮らしでの生きづらさ、困り感も含め、共に考え合うということをも基本に進めていくこととした。

さらに生涯学習推進コアメンバーの堀江まゆみ代表と小出薫氏(新潟TS・弁護士)と講座の今後の進め方についてTV会議(10月5日)で、「どう定着・持続可能なものにしていくか」「講座内容のポイントやどんな講座にしていくか」「キープセーフ+αで進めていくこと」「当事者たちとの座談会で意見を聞きいていく」等、協議した。

第1回の石狩大地の会向け講座は、生涯学習推進コアメンバーの平井威氏(明治大学客員教授)に急遽来ていただくことができ、セルフアドボカシー講座をKeep safeをベースに進められ、支援スタッフにとっても初めての実践を学ぶ絶好の機会となり、以後の講座展開に大いに参考になった。以下、地域活動支援センターえみなでのKeep safeをベースでの講座と地域活動支援センターアンナブルナでの当事者研究ベースでの講座の取り組みを報告することとする。



石狩市地域活動支援センターえみな セルフアドボカシー講座報告：

「危ない自転車の乗り方していいの?」「話し方とことばづかいについて」

社会福祉法人はるにれの里 報告：野田 宏

はじめに

地域活動支援センターえみなプログラムは、平日は午前、午後、夕方に分かれており、週末は午前、午後に分かれている。調理をはじめ、工作、カラオケ、ビデオ鑑賞、運動、学習会、ゲーム、戸外活動など、幅広いプログラムを行っている。また、石狩の本人活動の会「石狩大地の会」の事務局を担っており、年度初めの総会や月1度の役員会で、各種イベントを企画・実施している。今年度、大地の会では学習することを位置づけ、ゴミ問題や認知症の学習、人権セミナーの企画・運営に携わってきた。

セルフアドボカシー講座については地域活動支援センターえみなプログラムとして、また、大地の会として実施したそれぞれについて本報告にてまとめる。

開催日時は以下の通り。

1. 11月6日（水）19時から20時「危ない自転車の乗り方していいの?」（大地の会役員会にて実施）
- ② 11月16日（土）午前13時30分から午後15時、「危ない自転車の乗り方していいの?」（地域活動支援センター週末プログラムにて実施）
- ③ 12月4日（水）19時から20時、「話し方とことばづかいについて」（大地の会役員会にて実施）
- ④ 12月11日（水）13時30分から15時、「話し方とことばづかいについて」（地域活動支援センター平日プログラムにて実施）
- ⑤ 12月14日（土）13時30分から15時、「話し方とことばづかいについて」（地域活動支援センター週末プログラムにて実施）

場所：地域活動支援センターえみな



実施体制

- ① 11月6日(水)「危ない自転車の乗り方していいの？」(当事者7名、支援者9名)
初回講座ということもあって、生涯学習推進コアメンバーの平井威氏(明治大学客員教授)に来ていただき、セルフアドボカシー講座をKeep safeをベースに進められ、支援スタッフにとっても以後の講座展開に大いに参考になった。
- ② 11月16日(土)「危ない自転車の乗り方していいの？」(当事者2名、支援者2名)
- ③ 2月4日(水)「話し方とことばづかいについて」(当事者10名、支援者7名)
- ④ 12月11日(水)「話し方とことばづかいについて」(当事者3名、支援者2名)
- ⑤ 12月14日(土)13時30分から15時、「話し方とことばづかいについて」(当事者3名、支援者2名)

実施方法

・地域活動支援センターでは利用登録者、および過去に地域でのトラブルに支援を要した当事者から対象者を絞り、個別に案内をおこなう。大地の会では役員会の中で開催をおこなう。

当日は①研究の主旨説明と研究同意、②ウォーミングアップ、③賢者・ワル、分かれ道、二つの家のイメージ確認、④テーマの確認、⑤グループワーク(或いは個別に用紙記入)、⑥賢者、ワルの発言確認、⑦発表、⑧まとめ、の流れで実施した。



講座実施後の感想

(講座終了後の会話から)

- ・グッとくるものがあった。
- ・楽しかった。

- ・難しかった。
- ・他の人にちょっかいをかけて遊んでいるとき、イラストを思い出し、考え直して行動ができた。
 - ※当事者からの説明
- ・イラストは分かりやすく、思い出しやすい。
 - ※当事者からの説明

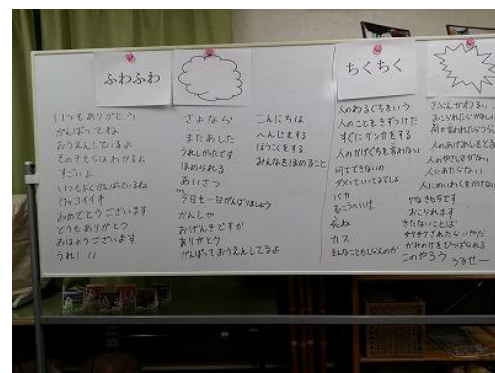


今後の課題

- ・地域活動支援センターの当事者については、自分の意見を書き出す（表現）するこ

との難しさがあった。一部の参加者はテーマ、質問に対し、期待されている回答や、正解・不正解を気にされている様子を感じられた。配布プリントから回答を探し出そうとする様子もみられた為、自分の意見を引き出せるような工夫が必要と思われる。今後も講座参加の機会を増やし、意見が肯定的に受け止められる経験を重ねていくことも重要と考える。

・大地の会の役員については、様々な意見が出て、グループワークでも活発な意見が出る事が多く、意見の少ない人も、他のメンバーの意見を聞くことは大変有意義な経験と感じられた。年に数回、役員会の中で講座を行えば、無理なく学習の機会をつくることができると考える。テーマについても役員から活発な意見が期待でき、今後、講座の定期開催に関して役員会に提案をおこなえればと思う。



地域活動支援センターannapurna（アンナプルナ）

当事者向け講座報告：自分自身とともに、暮らしを助ける当事者研究
～地味トラブル回避の研究～

社会福祉法人はるにれの里 報告：俵谷 知実

はじめに

地域活動支援センターannapurna（以下、「アンナプルナ」とする）は、2011年（平成23年）に発達障害のある方の居場所づくりを目的として開所した。主なプログラムは、仕事を体験する場としての「作業」や楽しむ場としての「余暇」、自分を知る場、他者を知る場としての「グループ」を3本柱に展開している。特に、開所当初からグループのプログラムの一環として発達障害のある人が取り組みやすいように工夫を加えた“当事者研究”を続けている。今回の当事者向け講座は当事者研究のプログラムの番外編として実施した。

実施期間・場所

日時：2019年（令和元年）12月10日（火）午前9時30分から午後11時30分

場所：アンナプルナ

実施体制

・職員2名・ピアサポーター（発達障害当事者）3名



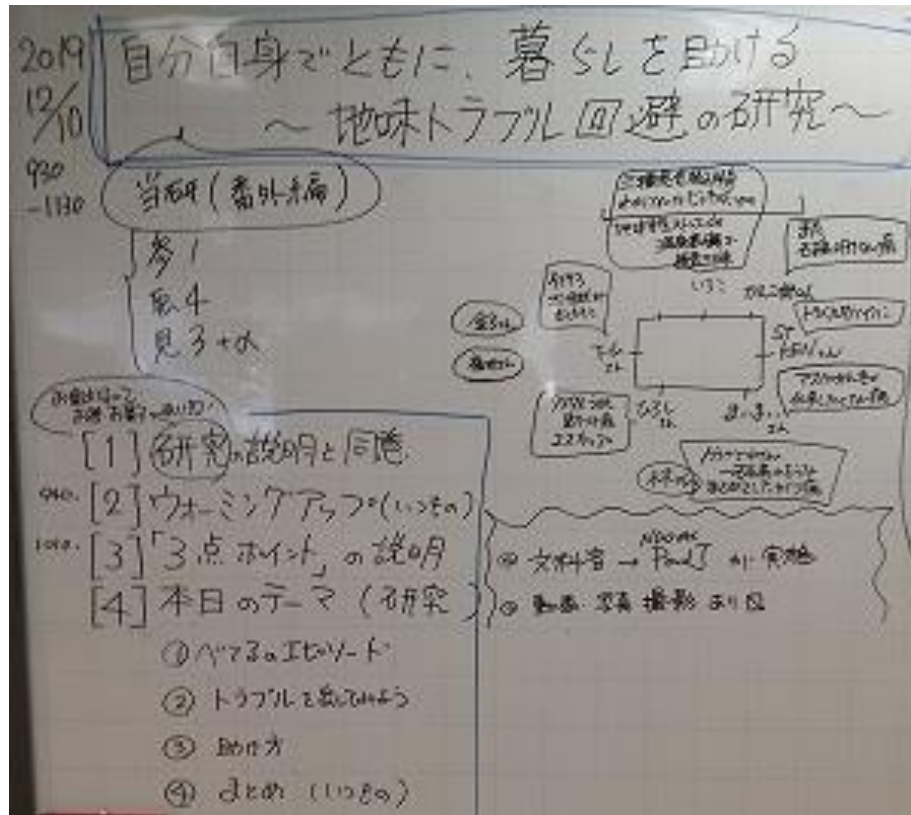


実施方法

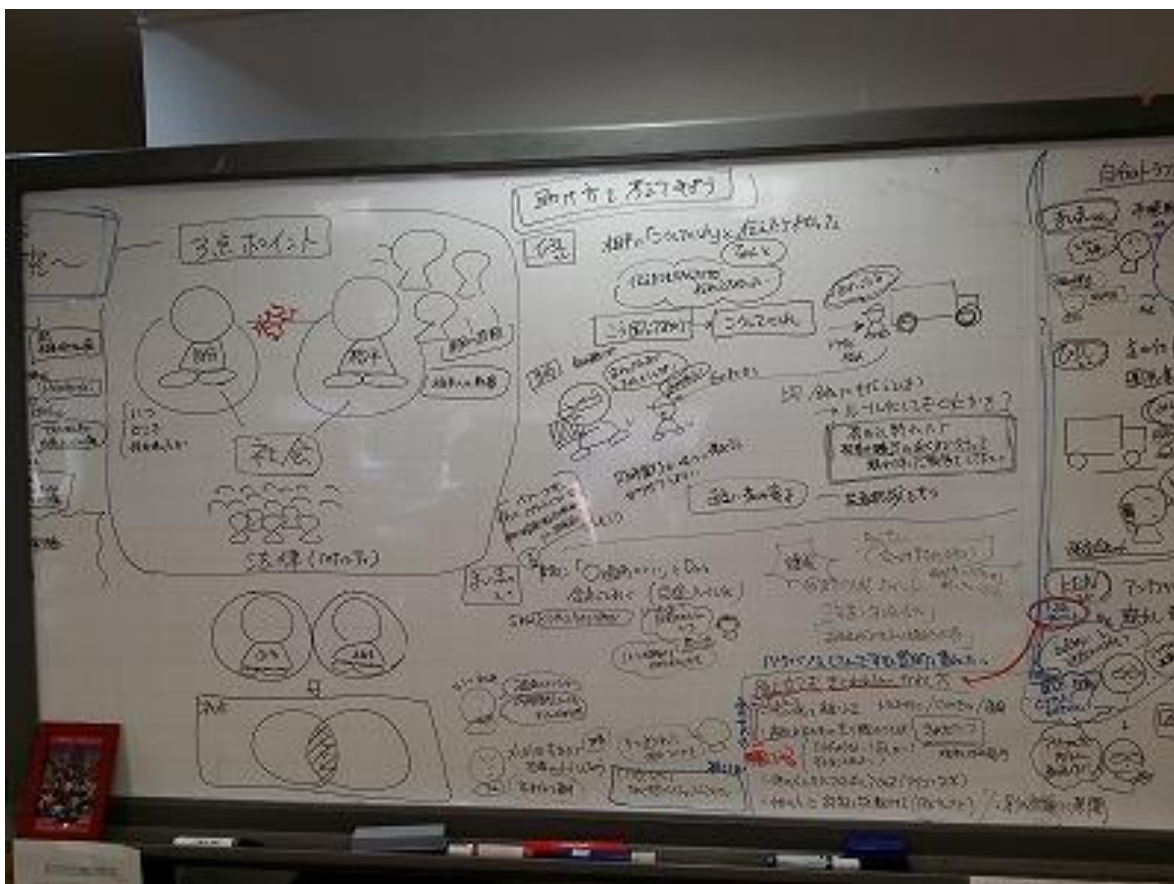
・アンナプルナの12月の月間予定表とポスターをアンナプルナに掲示して参加者を募った。参加者1名（当日他1名は体調不良のため欠席）と職員、ピアサポーターで実施した。

・当日は①研究の主旨説明と研究同意②ウォーミングアップ③3点ポイントの確認（自分・相手・社会の視点から起こったトラブルを眺め見る）

④べてるの爆発のトラブルエピソードの紹介⑤トラブルを出してみよう！⑥自分の助け方、他者からの助け方の提案⑦まとめの流れで実施した。



講座実施後の感想



(講座終了後の会話から)

- ・いつもと違う当事者研究だったので、どうなるかと思ったがおもしろかった。
- ・実施前の準備の打ち合わせはストレスだったが、やってみたらおもしろかった。
- ・どんなものかと思ったが、テーマ当研に似ていた (苦勞のテーマをあらかじめ設定した当事者研究)
- ・また (3点ポイントを取り入れた) 当事者研究でやりたい。
- ・社会や相手について「~かもしれない」と推測することは、被害的になることもあるが、行動を踏みとどまる助けにもなる。

今後の課題

- ・通常アンナプルナのグループは午後行っているが、今回午前から行ったせいか参加者が少なかった。
- ・当事者研究で問題を外在化することには参加者は慣れているものの、キープセーフプログラムで登場する「アバター」は、本講座の打ち合わせ段階からピアサポーターより馴染みのないものを取り入れる難しさについて意見があり、取り入れること断念した。
- ・専門的な言葉を用いると、当事者にとって言葉を理解しようとする代わりに発展

することがあり、講座の目的や内容から注意がそれてしまうことがあった。



甲信越北陸中部ブロック地域連携協議会

—新潟 TS

新潟トラブルシューターネットワークの活動

◎竹田一光 新潟TSネットワーク

高橋 友規	グループホームスマイル サービス管理責任者
池田 あさみ	独立型社会福祉士 ソーシャルワーカー
本多 崇人	新潟県地域生活定着支援センターセンター長・相談員
坂井 賢	新潟県地域生活定着支援センター相談員
平栗 華代	新潟県地域生活定着支援センター相談員
小出 薫	弁護士 弁護士
平野 英明	西蒲高等特別支援学校 教員
坂井 隆一	社会福祉法人のぞみの家福祉会 緑風園相談室 室長・相談員
貝沼 静江	新潟市障がい者基幹相談支援センター西 相談員

はじめに

新潟トラブルシューター（以下、TSと略）ネットワーク（以下、“新潟TSネット”と略）は、平成27年5月24日（日）に、新潟司法福祉研究会第8回目の会合として、新潟県では初めてとなる「TS養成研修」を開催したことに始まる。設立から4年半を経過した現在では、後述する4つの領域における活動を展開している。

本報告では、平成29年～31年、令和元年にかけて取り組んできた「新潟SOTS E C - I D研修会」と、平成31年1月から1年間取り組んできている知的・発達障害者の為の「セルフアドボカシー支援」研修について、中心に報告する。

1. “新潟TSネット”の活動目的

新潟TSの活動目的は、「地域でトラブルに巻き込まれた障害のある方や認知症高齢者の支援」である。この目的の為、福祉、矯正、医療、看護、教育、司法などの分野の関係者が集まり、任意団体を立ち上げた。当初は、不定期の勉強会の開催や、メーリングリスト（35名が登録）での情報交換が活動の中心であった。

その活動は、大きく分けると、次の4つになる。

- ①県内各地でのTS養成基礎コース研修の開催
- ②「性被害・加害者にならないために」を掲げたTS養成アドバンスコース研修の開

催、性加害を起こしてしまった知的・発達障害者向けの「新潟SOTSEC-ID」連続勉強会の開催

③「暮らしのルールブック」活用講座を出発点にした「セルフアドボカシー支援研修会」の様々な場面での開催と啓発活動

④司法面接・意思決定支援・地域生活定着支援センターやホワイトハンズの活動紹介など時々の大事な勉強会の開催

2. 平成29-30年度の活動

新潟SOTSEC-ID活動実績

上記の②の性加害を起こしてしまった知的・発達障害者向けの「新潟SOTSEC-ID」連続勉強会の開催が、平成29年度の中心活動となったが、これは、前年の平成28年8月7日に「性被害者・加害者にならないために」と題したTS養成研修アドバンスコースの新潟市での開催に触発されたものである。この研修での学びが、同年10月に東京pandA-J研究所で開催されたSOTSEC-IDの支援者研修会への参加、新潟TSネットのメンバーを派遣する原動力となった。この流れが新潟SOTSEC-IDプログラムを公務で担う礎にもなった。しかし、イギリスでは毎週1年間全60回が基本、というSOTSEC-ID研修会を自分達が地元地域で開催するということは、難しく開催に足踏みを繰り返していた。しかし、その間に本プログラム参加対象候補の一人が再犯してしまい逮捕され刑務所に収容されるという事態が発生した。そのため、まずは講座を実行し運営していくコアメンバー・協力者を募るべく「SOTSEC-IDを新潟でやろう！」3回連続勉強会を開催した。事務局を新潟TSネットが務め、まずは7名のコアメンバーで、文科省 科研費（主任 研究 堀江まゆみ：白梅学園大学 教授）2015年度～2017年度研究助成を受けて始まった。平成29年4/16、4/23、5/14、いずれも日曜日の10時～16時に、会場として休館日で人が来ない新潟市内の地域活動支援センター施設を使用し、講師としてNPO法人PandA-Jから堀江氏・平井氏を依頼した。平井氏からは多摩TSで開催された毎週、半年間連続計30回開催された「多摩SOTSEC」の実践報告は、とても参考になり、新潟SOTSEC-IDのコンポーネントは基本的に多摩TSのものを参考にしたものである。

この3回の本プログラム準備勉強会には、事務局・コアメンバーの7名の他に、県内から16名が参集した。職種は大学教授、精神科医、児童相談所職員、弁護士、刑務所法務教官、特別支援学校教員、地域生活定着支援センター職員、障害福祉サービス事業所職員、基幹相談支援センター相談員、障がい者計画相談支援専門員、触法者支援民間団体職員、独立型社会福祉士、学生、と多岐に渡る。3回連続講座の参加者にはメーリングリストを通じて、毎回のセッションの開催日を伝え、当日協力出来る方を募っていくやり方とした。結果的に、コアメンバーは12名まで増え単発での協力者を含めると15名ぐらいになった。

- 勉強会参加メンバー 3名 「STYLISH イケ★メンズ」(第2回の話し合いで決定)

- ・ 7/30(日)に当事者・ご家族への説明会を開催
- ・ 8/20(日)の第1回セッションの実施

以降、2週間に1回のセッションを行う。翌平成30年9/30の第30回目の最終セッションまで、1年間、参加メンズが再犯する事なく無事に開催することが出来た。その後11/18に、30回プログラム終了後のコアメンバーでのリスクアセスメント「アルミージロ」を実施。参加してくれた3人のメンズの効果測定を行った。さらにプログラム終了後3カ月後となる平成31年1/6に「謹賀新年カラオケ大会！振り返り同窓会番外編セッション」を、さらにそれから半年後となる令和元年7/7に「七夕BBQ大会！振り返り同窓会番外編セッションその2」を開催し、「新潟SOTSEC-ID(ソトセックアイディー)」メンバーが参加してくれた企画としては全33回となり、一連のプログラムを終了とした。令和2年1/18(土)には、プログラム開催に向けて連続学習会に参加してくれた方を中心に「新潟SOTSEC-ID実践報告会」開催する予定である。

3. 新潟SOTSEC-IDプログラムを実施してみて

新潟SOTSEC-IDプログラムに参加してくれたメンバーは以下の3人の男性である。

- Aさん：20代 中等度知的障がいと自閉症スペクトラム 療育手帳B(WAIS III IQ51)
- Bさん：10代 自閉症スペクトラム障害 手帳なし 境界知能(IQ70)
- Cさん：20代 軽度知的障がいと自閉症スペクトラム、緘黙 療育手帳B(IQ:63)

年齢・障がい状況・犯歴もバラバラな3人。当初、この3人でグループを組めるのか、そもそも一緒に学ぶ体験を共有できるのか、仲良くなる共感的・共鬨的關係性を築けるのかすら、不安な状況であった。しかし、状況としては、

- ・ プログラムの内容の理解⇒ふりかえりテストは、3人ともほぼ満点
- ・ 自分について語るコミュニケーションの促進(分からないこと、できないことも語れるようになる)
 - ⇒Aさんは、当初周囲の発言に追随していたが、後に率先して発言するようになる
 - ⇒Bさんは、自分の話を聞いた相手の認知を気にかける場面が増えた
 - ⇒Cさんは、筆談だが、とにかく説明の分量が増えた
- ・ 目指す「イケメン」像のブラッシュアップ
 - ⇒他のメンバーを配慮した行動がとれるようになる
 - ⇒他のメンバーの発言を待つ、受け止める、といった行動も出てきた
 - ⇒自尊心の向上、対人関係機能の向上が顕著であった。

このプログラムを通じて、分かった事は次の事である。

- ・ 性の話を真剣に聞くメンバーの様子から⇒自分の体に関わる性について、学ぶ機会がなかった
- ・ 被害者・家族の気持ちを知ってショックを受けるメンバーの様子から⇒どうして自分の行動が非難されるか、学ぶ機会がなかった
- ・ 性的な行動や怒りなどの衝動のコントロール、周囲との関係の築き方等の様子から⇒どうすれば社会的に認められるか、学ぶ機会がなかった

つまり、「性」×「犯罪」×「障がい」という“三重の係わりにくさのファクター”に親・教員・支援者・周囲の大人が影響され、本人に学びの機会が提供されない、本当の理解に導いてもらえないまま彼らが放置されてきた状況が見えてきた。知らない（未知※本当に理解できる迄丁寧に教えてもらえない）状況下での“誤学習”が彼らを性犯罪に導いてきたという背景要因が浮かび上がってきたのである。必要なのは、彼らが本当の理解に到達するまで、丁寧に学びの機会を提供していく事ということになる。性犯罪加害者にならないためには早くから、丁寧に、きちんと、確実に知識を届けていく必要がある。

4. 令和元年の活動

セルフアドボカシー支援に向けて

平成30年11／10東京で開催された全国TSネット活動報告会議に参加。

- 平成31年1月26日『暮らしのルールブック活用講座』in 自立訓練事業所ドリームカレッジ

主催：NPO法人PandA-J、新潟トラブルシューター、新潟市基幹相談支援センター西

講師：社会福祉法人南光愛隣会の南口氏「支援者向けの説明・障がい当事者への講座」ICT研修会 参加者：当事者6名 支援者14名

- 平成31年3月4日『障害のある人とともに考えるセルフアドボカシー支援』～暮らしのルールブックの活用～in 新潟市

主催：新潟市障がい者自立支援協議会相談支援連絡会相談支援体制強化班

講師：社会福祉法人南高愛隣会法人法務・相談室の南口英美氏、東京TS山田弁護士、新潟TS代表小出弁護士、1月活用講座（パイロット）に参加してくれた障がい当事者

内容：暮らしのルールブックを様々なところで活用してもらうため、主に支援者を対象に開催した。

参加者：86名（希望者は100名超：この問題の関心の高さを裏付けている）

この研修が、令和元年度の新潟市障がい者地域自立支援協議会相談支援連絡会権利擁護班の年間活動方針の柱の一つとして「障がい当事者のセルフアドボカシー支援活動」が位置付けられる契機となった。

研修実績

① 地域活動支援センターにて 障がい当事者対象の公開勉強会

- ・ 第1回：6／5（水） 13：30～14：30 「自分の情報は他の人にも
らさないんだよ」※終了 参加者：24名（当事者15名，家族1名，支援者3名，
主催スタッフ5名）
- ・ 第2回：6／19（水） 13：30～14：30 「ネット犯罪に気をつけよう」
※終了 参加者：16名（当事者11名，支援者1名，主催スタッフ4名）
- ・ 第3回：7／2（火） 13：30～14：30 「プライベートとパブリック」
※終了 参加者：16名（当事者12名，支援者1名，主催スタッフ3名）

- ・ 第4回：7／16（火） 13：30～14：30 「ものを盗んだらどうなる？」
※終了 参加者：17名（当事者12名，支援者1名，主催スタッフ4名）

- ・ 第5回：8／7（水） 13：30～14：30 「ものを盗んだらどうなる？～
その2」 参加者：14名（当事者10名，支援者1名，主催スタッフ4名）
- ・ 第6回：8／21（水） 13：30～14：30 「ものを壊したらどうなる？」
参加者：13名（当事者9名，支援者1名，主催スタッフ3名）
- ・ 第7回：9／5（木） 13：30～14：30 「だます手紙（詐欺）と正しい
手紙の出し方」 参加者：14名（当事者9名，支援者1名，主催スタッフ4名）
- ・ 第8回：9／17（火） 13：30～14：30 「性犯罪を考える～その1」
参加者：13名（当事者9名，支援者1名，主催スタッフ3名）
- ・ 第9回：10／1（火） 13：30～14：30 性犯罪を考える～その
2」 参加者：15名（当事者10名，支援者1名，主催スタッフ4名）
- ・ 第10回：10／15（火） 13：30～14：30 「人から誘われた時
は気を付けよう」 参加者：17名（当事者13名，支援者1名，主催スタ
ッフ3名）
- ・ 第11回：11／7（木） 13：30～14：30 「やめられなくなる時
があります」 参加者：16名（当事者11名，支援者1名，主催スタッフ
4名）
- ・ 第12回：11／21（木） 13：30～14：30 「こころの停止ボ
タンをみつけてつかってみよう」 参加者：17名（当事者11名，支援者1
名，主催スタッフ5名）
- ・ 第13回：12／20（金） 13：30～14：30 「言っていること
わるいこと」 参加者：24名（当事者17名，支援者2名，主催スタッフ5
名）

- ・ 第14回：1/20（月） 13：30～14：30 「こんな時はどんな行動がよいだろう」参加者：15名（当事者11名，支援者1名，主催スタッフ3名）

●今年度は、これ以降も月1回のペースで実施予定

- 新潟市西蒲区の障がい者地域自立支援協議会で地域課題の一つとして挙げられた「セルフアドボカシー支援の必要性」の課題に対応して地区担当の障がい者基幹相談支援センターが業務として対応するという枠組みで実施されている。

② 支援者に対する研修会

A 障がい福祉サービス事業所職員 7/20（土） 10：00～12：00

「性トラブルにどう対処？～実際困っている事例で考えよう 参加者：50名（職員48名、主催スタッフ2名）

- 新潟市障がい者地域自立支援協議会相談支援連絡会権利擁護班の今年度活動方針である「セルフアドボカシー支援」の一貫として啓発としての研修会講師を本業公務で担っている。

B 特別支援学校教職員 7/30（火） 9：30～11：30

「犯罪に巻き込まれないための本人との学び（暮らしのルールブックの活用）」

参加者：特別支援学校小・中・高等部での教職員・寄宿舍支援員54名

- 新潟市西蒲区の障がい者地域自立支援協議会がく・ふく連携会議で要請があり、担当の障がい者基幹相談支援センターが本業公務として対応～上位にある市自立支援協議会権利擁護班活動ともリンクしている

C 身体・知的障がい者相談員 10/10（木） 14：05～15：25

新潟市身体・知的障がい者相談員研修会「犯罪に巻き込まれないための『地域づくり』と『本人との学び』セルフ・アドボカシー支援（暮らしのルールブックの活用）」

参加者：約60名

- 新潟市主催：自立支援協議会権利擁護班で講師を担う

D 地域生活定着支援センター社会福祉士 9/27（金） 9：50～10：30

「新潟トラブルシューターの取組み 新潟SOTSEC-ID」 参加者：約30名

E 新潟県障がい者地域生活支援

④障がいのある方のご家族向けの研修会 10/23（水） 10：00～12：00

新潟地区手をつなぐ育成会会員研修会 「楽しく生きていくために～セルフアドボカシーについて考える」参加者：約100名のご家族に対して

- 市自立支援協議会権利擁護班の今年度活動方針である「セルフアドボカシー支援」の一貫として本業公務として研修会講師を担っている

5. 今後の課題

「障がい当事者のセルフアドボカシー支援」の活動は、まさに始まったばかりで

あり、その目的は、犯罪に巻き込まれないための「地域づくり」である。新潟では、今年、様々な場所で、様々な方々に、その“種蒔き”をした。次の段階は、“発芽支援”であり、“育苗”である。より多くの場所（事業所・学校）で、「セルフアドボカシー支援活動」を実践できる支援者を増やしていく、これを来年度に向けての課題と考えている。その上で大事にしたいのは次の事である。「集団における個人の行動や思考・価値観等は、集団から影響を受け、また逆に、集団に対しても影響を与えるというような、集団を構成する個人同士の相互依存関係から派生する効果を求めるグループ支援と、緊急性や常習性など個別でのセッションが必要な場合のマンツーマンでの支援、この2つを組み合わせ、ケースバイケースで支援していくことが大事」であること。そして、いずれにも共通しているのは「自尊心を高めること」ことだということ。「解決策がわかった」「他人にアドバイスできる」「できそうだ」という理解や役に立つ経験・可能性」を体感してもらう事を意識し続ける必要がある。つまり、この講座を行う（広める）上で大事な事は、「暮らしのルールブック」に載っているような犯罪や危ない行為を、単に「これをしてはダメ」と教える講座ではないという事を特に理解する必要があるという事である。大事なことは、当事者が「自分が楽しく生きていくために守ること」に気づき、それを守るためのスキルを身につけ、進んで実践し、信頼できる人に必要な援助を求めることができるようになることである。そして、この講座活動を通じて、支援者・保護者の「これまでの当事者への眼差し」を更新し、当事者の可能性や課題を新たに発見することで、これまでの個別支援計画を見直し、個別安全計画を組み込んだ支援に発展させる契機を作り出すことが大事であると考えている。

先述した様に、地域活動支援センターで毎月2回、障がい当事者との勉強会を続けてきているが、ここでは、支援する人・される人という硬直した関係性にはならない様、特に気を配って展開してきた。このことが、この勉強会を単に「やってはダメな事を教え込まれる場」ではなく、主体的に楽しみに参加し続けてくれている理由なのではないかと考えている。日頃、福祉サービスを利用して、支援する人される人という関係の中で、この場面では、一緒に考えるメンバー（スタッフ職員も参加者）になるのである。

次年度の目標

- ① 障がい者基幹相談支援センターの中で、事前のアセスメントができているメンバーを集めてセルフアドボカシー支援活動を進める。
- ② 自立訓練生活訓練の施設で、次年度取り組みたいと申し出があるため、出前でやっていきながら、その施設で取り組めるように進めていきたい。



東北ブロック地域連携協議会—盛岡 TS

盛岡 TS における K e e p S a f e の取り組み

◎長葎康紀	岩手県発達障がい者支援センター
北向 細子	岩手県地域生活定着支援センター 所長
佐々木悟司	岩手保護院 補導主任兼福祉職員
高橋 岳志	かんな相談支援事業所 相談支援専門員
長葎 千恵子	障害者 1 1 0 番 専門相談員
高橋 一人	日本司法支援センター岩手地方事務所 事務局長
工藤 宏行	盛岡基幹相談支援センター My 夢 相談支援事業所 太田の園 所長
下野 博史	盛岡保護観察所 統括保護観察官
望月 敦允	高橋法律事務所 弁護士
佐藤 友紀	発達障がい沿岸センター 主任相談支援員

はじめに

盛岡トラブルシューターネットワーク（以下、盛岡 TS ）は、平成 2 8 年度より実施してきたトラブルシューターの研修会実行委員会を母体とし、平成 3 0 年度より定期的な会合を設けて、障がい者による触法トラブルへの支援のネットワークづくりのために事例検討を中心とした勉強会を行うこととした。

メンバーは弁護士、日本司法支援センター（法テラス）、保護更生施設、保護観察所、地域生活定着支援センター、基幹相談支援事業所、独立型社会福祉士、障がい者 1 1 0 番相談室、発達障がい者支援センター、発達障がい沿岸センターに所属する 1 0 名である。

その取り組みの中で、性問題行動のある思春期・青年期の知的障がい・発達障がい者への支援である K e e p S a f e の存在を知り、県内でも対応が十分ではなく、支援の必要性が高い分野であったことから、実施することとした。

1. 実施にいたる経緯

盛岡 TS のメンバーが所属する相談機関では、それぞれに触法行為を行った障がい

者への支援を行っていた。

平成28年度、29年度に実施したトラブルシューターの研修会を通じて、ネットワークの必要性や定期的な学びの場が必要であると考え、触法ケースの事例検討を行っていく場として盛岡TSとして活動を開始した。活動の中で、同じような課題のあるケースに対し、それぞれの機関で対応している状況がわかった。

また、その中でも特に性問題行動に対しては、対応の困難さを多く感じていることもあげられた。

岩手県発達障がい者支援センターでは性的トラブルに関しては問題行動の1つとして、個別の相談の中で対応を行う程度であったが、近年は性的トラブルへの対応困難さを主訴としての相談が寄せられるようになってきた。

知的障がい、発達障がいのある児童への性教育は体系的に行われておらず、性的トラブルへの対応は行動の制限（他者との接触を減らす）や、行動の振り返りを繰り返すことも多かった。

「障がいがある」、「性の問題」という両面から対応に対して尻込みしてしまいます状況に対して、支援方法を模索していた中で、Keep Safeの存在を知り、実施に向けた検討を行うこととした。

2. 実施に向けた取り組み

平成31年2月23日に基礎研修会を行い、協力してもらえる人を募ったうえで、実施に向けた計画を立てていった。実施期間を9か月間とし、土曜日の午前中に2週に1回（本人セッション計18回、保護者セッション計9回）実施することとした。

盛岡TSのメンバーと、協力者を対象に4月に2日（13日、14日）、5月に1日（26日）のインストラクター研修を行った。マニュアルの読み合わせや演習を行い、プログラムへの具体的なイメージ作りを行った。

その間に盛岡TSの会合を行い、参加者の選定を行った。盛岡TSのメンバーの所属先である地域生活定着支援センター、基幹相談支援事業所、発達障がい者支援センターから1名ずつ選んだ。

6月22日に参加者及び家族との同意書の取り交わしとアセスメントを実施した。

7月2日に最終的な確認を行い、7月12日から第1回の取り組みを開始した。

3. 参加者の概要

盛岡での実践に参加しているのは15歳から20歳までの男性3名である。

診断名は「ADHD」、「ASD、ADHD、愛着障がい、知的障がい」、「知的障がい」である。

中学校、就労支援を行う施設に通っており、自宅やグループホームで生活している。IQは50、それぞれに女性への抱き着きや身体接触、強制わいせつ等のトラブルがあり、1名は少年院への入所経験がある。

4. 実践の様子

盛岡TSでの実践は、令和元年7月12日から行った。スタッフは各回5～9名の参加である。主な本人セッションのメインファシリテーターを発達障がい者支援センタースタッフが、保護者セッションのメインファシリテーターは発達障がい沿岸センタースタッフが務め、各回ごとにセッションの展開案を作成し、事前にスタッフに配布している。

表1. 展開案

キープセーフ 展開案

YG(/PC)第1回 歓迎と導入 展開案

日時：2019年7月13日(土) 10:00-12:00

場所：盛岡市総合福祉センター

担当(MFT)：長葎

SFT

セッションのねらい：

- ① グループに参加することに対する不安を解消し、誇りをもって参加できるようにする
- ② グループ内のルールを自分たちで決め、グループとして規律にのっとった有意義な関わりを深める。

時間 配分	学習活動 (当事者の活動とMFの発問等)	留意点 (SFTの活動、教材・教具、留意すること等)
導入 10分	<p>1 オリエンテーション</p> <p>① MFからの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グループに参加する目的の確認。 ・ プログラムの説明。 ・ 本セッションの説明。 <p>2 アイスブレイク(参加者と保護者がペア)</p> <p>① お互いに顔が見えるように座り方を工夫する</p> <p>② 自己紹介タイム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 参加者には名前と年齢を紹介してもらう。 ・ 保護者には「〇〇の父(母)」と紹介してもらう。 ・ スタッフは名前と所属を紹介する。 <p>③ 質問タイム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ AさんペアがBさんペアに、BさんペアがCさんペアに、CさんペアがAさんペアに1つずつ質問をする。 	<p>※は用意するもの</p> <p>① 目的、プログラムの説明を書いた紙を配付する。 ※説明用の紙</p> <p>② 参加者をホワイトボード①に記入する。 ※ホワイトボード ※ペン、イレイザー</p> <p>③ 質問①の紙をホワイトボード②に貼る。 ホワイトボード①に質問の答えを記入する。 ※ホワイトボード ※質問①の紙</p>
展開 1 15分	<p>3 グループルールの設定</p> <p>① MFからの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なぜルールが必要なのか。 ・ 今からグループのルールを決めること。 ・ グループのルールはみんなで守ること。 <p>② ルール決め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スタッフが1人、ルールの例を発表する。 ・ それぞれのペアで、ルールを話し合って1つ考えてもらう。 	<p>② ルール例はスタッフ用の手持ち資料として準備</p>

9時にスタッフが集合し、会場準備をした後に当日の流れの打ち合わせを行う。10時からセッションを開始し、休憩をはさんで12時まで行う。終了後は片付けを行った後に振り返りを行う。

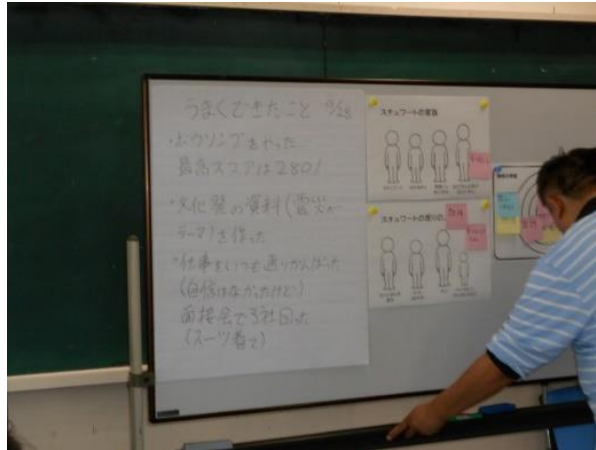


写真1. 実践の様子

実践の様子はビデオカメラ、ICレコーダー、デジタルカメラで記録に残している。

5. 実践後の変化

実践開始直後は表情も硬く、サングラスやマスクを着用していた参加者もいたが、回を追うごとに表情は柔らかくなっていった。過去に受けた指導のためか、性的な話題になることを避けている参加者もいたが、スタッフも含めて「性は当たり前のこと」という雰囲気を作っていく中で、少しずつ話ができるようになっていく。「Keep Safeには守秘義務があるから」と話す参加者もあり、安心感の中で実践が行えている様子もみられる。

6. 課題

実践を行う中で、新たな性問題行動が見られた参加者が2名いた。その内容をスタッフ間で共有し、関連する内容をセッションの中で取り入れるなど、臨機応変な対応を行っている。今後、セッションが進む中で、具体的に自分が行った性問題行動に直面する場面もあり、セッション後のフォロー体制は課題となってくる。

2週間に1回のセッションで、展開案の作成から教材準備、報告書の作成などの煩雑さがあり、今後展開を広げていく際にはスタッフの確保が重要になると思われる。

Keep Safeの実践の話聞いた学校関係者、福祉関係者から、発達障がい者支援センターに性教育、性問題行動への指導の依頼が増えている状況で、地域の実践者を増やしていくことが大きな課題である。

児童相談所ブロックー名古屋市中心児童相談所

名古屋市中心児童相談所におけるKeep Safeの 実施について

◎橋本佳子（名古屋市中心児童相談所）

他、児童相談所心理職、ケースワーカーのチーム

はじめに

名古屋市中心児童相談所では、知的障害を有する児童による性加害行為への対応としてKeep Safeを実施している。ある障害児入所施設において、児童間の性加害、性被害の連鎖が長年続いており、児童相談所と施設ではその都度対応してきたが、有効な手段を見いだせずにはいた。この度、性加害行為ないし性問題行動をしたことがある知的障害を持つ児童に対してKeep Safeプログラムを実施することで、性加害、性被害の連鎖を断つことを目指した。

1. 施設内での性加害・性被害

障害児入所施設では、家庭内で性的虐待を受けた経験のある児童、施設内で性被害を受けた経験のある児童等、幼少の頃に性被害の体験を持ち、成長したところで加害者として性加害に及ぶという背景があった。施設内では、従前、性加害行為ないし性問題行動に及ぶ児童へ個別に指導、施設や部屋割りの変更、家庭裁判所への送致等の対応をしてきていたが、施設内の子どもへの統一的な性教育や性加害プログラムは実施していなかった。

2. 令和元年度実績

- 令和元年6月3日から毎週月曜日（祝日の場合は翌日）午後4時から1時間のセッションを実施している（全38回。令和2年2月24日終了予定）。対象児童3名（高等養護学校2年生1名、高等養護学校1年生1名、中学校特別支援級1年生1名。いずれも男子、軽度知的障害、3人のうち1人に自閉症スペクトラム障害あり）。
- 各セッションに児相職員3名～4名程度、施設職員1名が参加する（ファシリテーター、子ども1人に職員1人ずつ補助として配置）。
- セッション前後に児相職員と施設職員で準備及び振り返り。
- 毎週金曜日、事前準備・打ち合わせ。
- 毎月1回施設職員向けにセッション内容解説及び保護者プログラムの内容を伝える。

3. 成果

現在、施設職員やプログラム実施担当者間で共有された成果として、

- セッションを通じて児童の性やプログラムに関する理解の程度を具体的に把握できるため、日常生活や個別指導においても有効。
- 児童、施設、児相間で情報や意見交換がしやすくなった。
- 児童が、性に関する話題も含めて話をし易くなっている。
- 何が「グッド」で何が「バッド」なのか、明確な基準が何度も繰り返し伝えられることで、子どもたちの理解も深まっている（プログラム期間中、ある児童に暴力行為が見られたが、指導時の反応、理解が以前と比べて良好であり、指導後からプログラム参加への積極性が高まった）。
- 施設職員の性加害行為への取り組みに関するモチベーションアップに繋がっている。

が挙げられている。なお、性問題行動へのアセスメントは、プログラム終了後に行われる予定である。

4. 今後の課題

- 継続的に実施するには、子どものみならず、子どもの保護者（施設職員）の理解が不可欠であることは分かった。保護者プログラムの充実化を図りたい。
- 児童が理解できるような伝え方や障害に由来する特徴（例えば自閉症スペクトラム障害に由来するこだわり等）を踏まえた対応の仕方等、個別性を踏まえたプログラム実施が必要である。
- 毎週1時間のセッションに加えて事前準備が必要となるため、時間、人員の確保が不可欠。複数のグループや対象範囲を拡大するには更に人員を確保していく必要がある。
- プログラム終了後のフォローアッププログラムは未検討である。プログラムの内容を定着させ、時折ブラッシュアップさせることが再発防止に繋がるため、フォローアップの内容、頻度、時期についても検討したい。

1. 施設内での性加害・性被害

障害児入所施設では、家庭内で性的虐待を受けた経験のある児童、施設内で性被害を受けた経験のある児童等、幼少の頃に性被害の体験を持ち、成長したところで加害者として性加害に及ぶという背景があった。施設内では、従前、性加害行為ないし性問題行動に及ぶ児童へ個別に指導、施設や部屋割りの変更、家庭裁判所への送致等の対応をしてきていたが、施設内の子どもへの統一的な性教育や性加害プログラムは実施していなかった。

2. 令和元年度実績

- 令和元年6月3日から毎週月曜日（祝日の場合は翌日）午後4時から1時間のセッションを実施している（全38回。令和2年2月24日終了予定）。対象児童3名（高等養護学校2年生1名、高等養護学校1年生1名、中学校特別支援級1年生1

名。いずれも男子，軽度知的障害，3人のうち1人に自閉症スペクトラム障害あり）。

- 各セッションに児相職員3名～4名程度，施設職員1名が参加する（ファシリテーター，子ども1人に職員1人ずつ補助として配置）。
- セッション前後に児相職員と施設職員で準備及び振り返り。
- 毎週金曜日，事前準備・打ち合わせ。
- 毎月1回施設職員向けにセッション内容解説及び保護者プログラムの内容を伝える。

3. 成果

現在，施設職員やプログラム実施担当者間で共有された成果として，

- セッションを通じて児童の性やプログラムに関する理解の程度を具体的に把握できるため，日常生活や個別指導においても有効。
- 児童，施設，児相間で情報や意見交換がしやすくなった。
- 児童が，性に関する話題も含めて話をし易くなっている。
- 何が「グッド」で何が「バッド」なのか，明確な基準が何度も繰り返し伝えられることで，子どもたちの理解も深まっている（プログラム期間中，ある児童に暴力行為が見られたが，指導時の反応，理解が以前と比べて良好であり，指導後からプログラム参加への積極性が高まった）。
- 施設職員の性加害行為への取り組みに関するモチベーションアップに繋がっている。

が挙げられている。なお，性問題行動へのアセスメントは，プログラム終了後に行われる予定である。

今後の課題

- 継続的に実施するには，子どものみならず，子どもの保護者（施設職員）の理解が不可欠であることは分かった。保護者プログラムの充実化を図りたい。
- 児童が理解できるような伝え方や障害に由来する特徴（例えば自閉症スペクトラム障害に由来するこだわり等）を踏まえた対応の仕方等，個別性を踏まえたプログラム実施が必要である。
- 毎週1時間のセッションに加えて事前準備が必要となるため，時間，人員の確保が不可欠。複数のグループや対象範囲を拡大するには更に人員を確保していく必要がある。
- プログラム終了後のフォローアッププログラムは未検討である。プログラムの内容を定着させ，時折ブラッシュアップさせることが再発防止に繋がるため，フォローアップの内容，頻度，時期についても検討したい。

関東ブロック地域連携協議会—多摩TS

多摩トラブルシューターネットワーク

令和元年度の活動報告

- ◎福田和弘（青梅福祉作業所 施設長）
◎小川晴美（NPO法人燦 総合施設長）



- 石原久子（福祉作業所天成舎 施設長）
平井 威（明星大学 客員教授）
奥田 眞（東日本少年矯正医療・教育センター 法務教官）
大沼健司（東京都立青峰学園 進路指導部主任）
阿部幸枝（東京都南多摩保健所 保健対策課地域保健担当）
穂積 弘（東京都七生福祉園 児童支援部門長）
遠 直美（東京都立光明学園 研究部主任）
鈴木七重（社会福祉法人 けやきの杜 希望園 施設長）

1. 多摩TSにおける障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究

（1）セルフアドボカシー支援に向けたゼミナール

- ① 多摩TSでは、知的や発達に障害のある方たちを対象としたトラブル回避のための学習を暮らしのルールブックを主に活用したゼミナールを開催する。
② 当事者だけではなく、家族や福祉等支援職員も巻き込む形でゼミナールを進める。

2. 準備セミナー

開催日：平成31年2月9日

会場：TK立川ビル

講師：南口英美・松友 大氏

（南高愛隣会）

対象者：教育・福祉等支援スタッフ・家族

テーマ：・性問題行動のある知的障害者・発達障害の青少年や成人、保護者に向けた修復的グループ学習プログラムを実践するための準備及びリサーチ。

・多摩地域で持続可能なスタッフグループを集める。

進め方：暮らしのルールブックのセッションを参加者を対象に実践する。参加者が体験して感じたことなどをグループセッションで出し合い発表する。

（1）プログラム

1) 開始挨拶と学習会の趣旨説明（13：00～

*文科省の実践研究について

*多摩TSの取り組みの方向性

2) セミナー開始 (13:10~)

- ①暮らしのルールブックの概要
- ②「やってみよう」(13:40~)
- ③アンケート記入(休憩)(15:05~)
- ④ディスカッション(15:20~)

セルフアドボカシーの支援という視点から、学校や福祉事業所、家庭で誰でもがファシリテーターになれる教材と進め方のパッケージについて意見交流をした。

この参加者から、当事者向けのゼミナールにおいて新たに参加する人が増えたので、準備セミナーの開催意義があった。

3. 第1回目ゼミナール

開催日：令和元年 5月19日(日)

会場：就労継続支援B型事業所

天成舎(国立市)

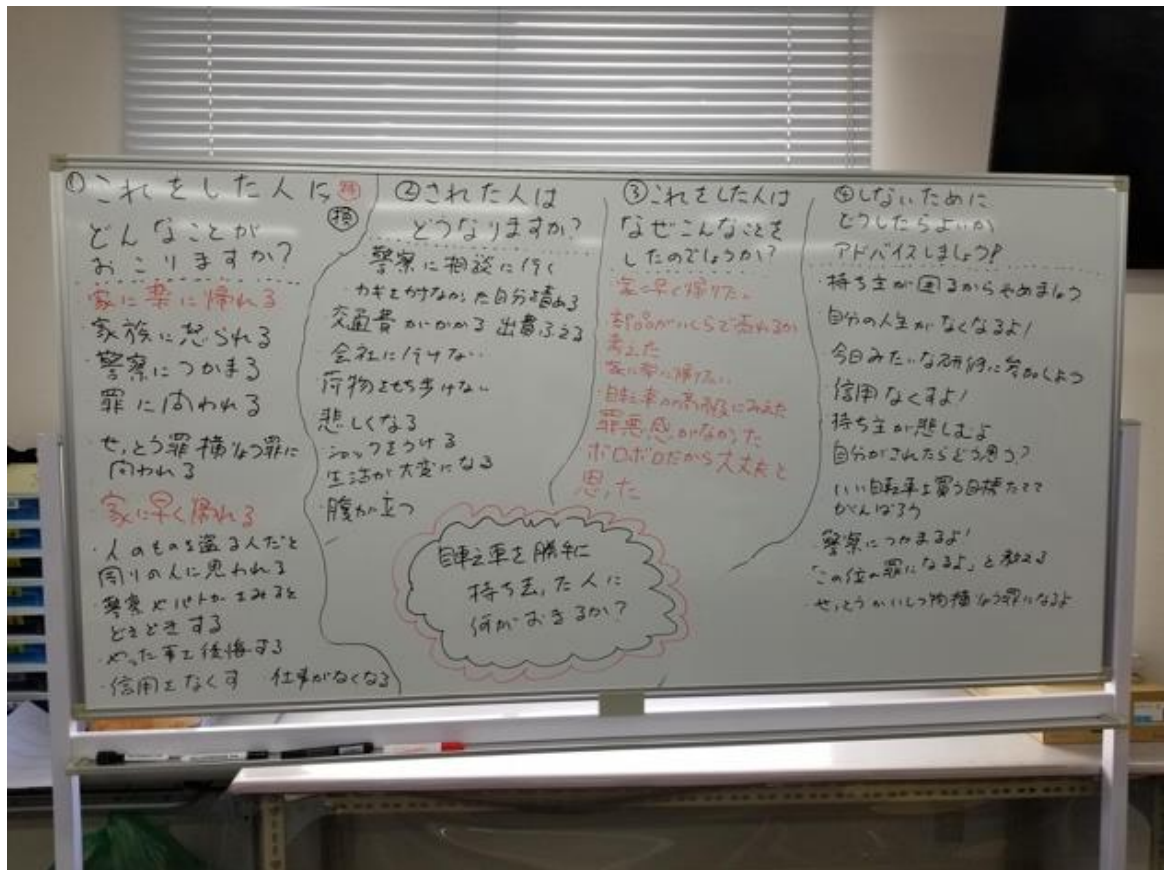
テーマ：「自分のものではない自転車を持ってきたら、何が起きるでしょう」

めあて：「ルールブックを使って誰でもセッションができることを示す」のが狙いなので何も用意せず臨む。受講生は、「ルールブック」と添付のワークシート(汎用版)だけで学ぶことになる。ただテーマによっては、その場でネットから情報を得て示したり、受講生の意見をみんなにフィードバックしたりするために、インターネットサイトやパワポを大写しできるプロジェクターを用意した。

ファシリテーター 平井 威

(明星大学客員教授)

進め方 当事者や保護者、支援職員等を3グループに分ける



(1) プログラム

1) 開始挨拶と学習会の趣旨説明 (14:00～)

2) 自己紹介 (14:03～)

3) 本日の流れの説明 (14:10～)

4) 全体ワーク (14:15～)

ワークブックも見つつ、ワークシートに沿って班ごとに話し合い、意見を報告し司会脇の白板に書き出し共有した。

5) 休憩 (15:00～ おやつ・飲み物つき。)

6) 班別グループワーク (15:20～)

テーマは班ごとに、ワークブックを見て決めて頂いた。利用者が含まれる班は、利用者の課題に合わせる様にした。

7) ワーク報告 (15:55～ 利用者が含まれる班は、利用者に報告をお願いした。)

8) 解散 (16:00)

(2) 実施状況

1) 全体ワーク (14:15～)

ワークブックも見つつ、ワークシートに沿って班ごとに話し合い、項目ごとに意見を報告し、司会脇の白板に書き出し共有した。

①「これをしたひとに、どんなことがおこりますか」(利得は斜体、損益は太字)

・薬に帰宅できる。早く帰宅できる。

・警察に捕まる。ドキドキする。人のものを盗る人だと思われる。家族に怒られる。信用を無くす。

②「されたひとはどうなりますか」

・警察に相談に行く。交通費がかかる。会社や学校に行けなくなる。ショックをうける。腹が立つ。

③「これをしたひとは、なぜこんなことをしたのでしょうか」

・早く家に帰りたい。部品がいくらで売れるか考えた。罪悪感がなかった。ぼろぼろだから大丈夫と思った。

④「しないために何をすればいいか、アドバイスしましょう！」

・持ち主が困るからやめましょう。自分の人生がなくなるよ。警察に捕まるよ。信用なくすよ。今日みたいな勉強会に参加しよう。“この位の罪になるよ”と教えてあげる。相手が悲しむよ。仕事なくすよ。

2) 班別グループワーク (15:20～)

テーマは班ごとに、ワークブックを見て決めて頂いた。利用者が含まれる班は、利用者の課題に合わせる様にした。

3) ワーク報告 (15:55～)

利用者が含まれる班は、利用者に報告をお願いした。

4. 2回目ゼミナールに向けて、狙いの再確認をする

(1) ねらい

*この講座は、「暮らしのルールブック」に載っているような犯罪や危ない行為に及ん

でしまいそうな当事者を対象にしますが、単に「これをしてはダメ」と教える講座ではないこと。

*大事なことは、当事者が「自分が楽しく生きていくために守ること」に気づき、それを守るためのスキルを身につけ、進んで実践し、信頼できる人に必要な援助を求められることができるようになること。

*同時に、支援者・保護者の「これまでの当事者への眼差し」を更新し、当事者の可能性や課題を新たに発見することで、これまでの個別支援計画を見直し、個別安全計画を組み込んだ支援に発展させる契機を作り出すこと。

(2) ゼミナールの進め方

*添付の「学習シート」に沿って進めることで、上のねらいを達成できるようにしてある。

・まず当事者に「暮らしのルールブック」のどのテーマの学習をしたいか聞く。(書いてもらう) その際、理由が言える人には「理由」も言って(書いて)もらいます。

例：家族のお金を取る　ひと月前お母さんの財布から5千円抜き出して、それがバレて怒られた。

もう二度としたくない、親に信用されたいから。

*当事者が選んだテーマについて、ワーク1からワーク5までの順で学習する。

当事者と保護者・支援者が、一緒に参加した方が効果的です。(グループを別々にするなどの配慮も必要な場合があります)

ワーク1 これをした人にどんなことがおこりますか？(結果Cを考える)

ワーク2 された人はどうなりますか？(結果Cの別側面を考える：共感を引き出す)

ワーク3 これをした人は、なぜこんなことをしたのでしょうか？(先行条件Aを考える)

ワーク4 しないためにどうしたら良いかアドバイスしましょう。(解決策を考える)
「働きかける者が働きかけられる」という教育原則の適用)

ワーク5 4のアドバイスをロール・プレイでやってみよう！(行動化による考えたことの定着)

「解決策がわかった」「私でも他人にアドバイスできる」「できそうだ」と言う「理解・役に立つ経験・可能性」を当事者に体感させることが大事。

なお、この5ワークの展開はほとんどのテーマで実践できますが、なかには他の展開が適切なテーマもある。

*学習後の話し合い

学習して、良かったこと、覚えておくこと(私の安全課題)、そのために支援してほしいことを明らかにする。

以上は、当事者向けの展開。

同時並行で、支援者・保護者にも、ワークシートに沿って当事者とともに学習に参加することで・・・当事者理解・見方の変化、当事者の安全支援課題を明らかにする、そのことが個別支援計画の見直しにつながるという一連の過程を経験することが大事。

以上を実践するとなると、集団の大きさにもよりますが、1つか2つのテーマを取り上げて2時間程度とする。

5. 「第2回 暮らしのルールブックを使用した セルフアドボカシー育成講座」

開催日 令和元年 9月 7日 (土)

会場 就労継続支援B型事業所
天成舎 (国立市)

テーマ: 「適切な距離を置いた SNS との付き合い方について」

ファシリテーター: 大沼 健司

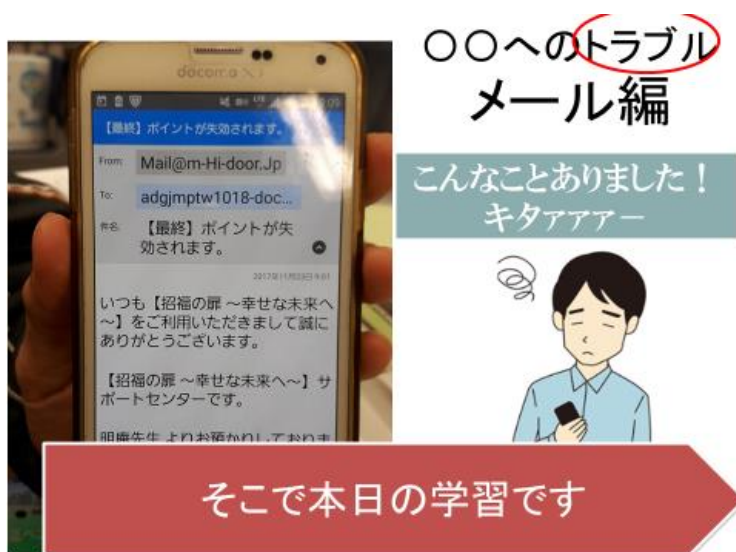
(東京都立青峰学園主幹教諭)

今回の題材は、特に身近なトラブルである SNS, 携帯電話に関連するものとした。地域で安全に暮らすためには、トラブルに①あわないための予防。②トラブルがきたら回避。③トラブルにあったときの対処が必要であり、今回は「予防」を観点とした。

(1) プログラム

- 1) 開始挨拶と学習会の趣旨説明 (14:00~)
- 2) 自己紹介 (14:03~)
- 3) 本日の流れの説明 (14:10~)
- 4) 全体ワーク (14:15~)

「SNSのトラブル」(メール編)のパワーポイントとワークシートに沿って班ごとに話し合い、意見を報告し、司会の脇の白板に書き出し共有した。また、講座の工夫の一つとしてパワーポイントを活用して視覚情報を多用した。



ワーク1 「よく見たら系」(知らない人からのメールや情報がおかしいメール)

実際のメール画面を見ながら「知らない人からのメールやLINEに返信したら、どういったことが起きる可能性がありますか?」を話し合った。また、ワーク2として「知らない人からメール等が来たらどうしたらよいですか?」を話し合い、それぞれ出された意見を出し合った。

ワーク3 「しまった系」(ついクリックしてしまった。返信してしまった)

「もしクリックしてしまい、お金の請求がきてしまったらどうしますか?」を考え

意見を出し合った。

ワーク4 「友達になりませんか？」などの怪しいメールが届いたらどうしますか？それぞれの意見、対処法について話し合った。

5) 休憩（15：00～ おやつ・飲み物つき。

6) 班別グループワーク（15：20～

ワーク5 「SNSのトラブルに巻き込まれないためには、どうしたらよいのかアドバイスをしてみよう」トラブル

に巻き込まれてしまった友達を想定し、アドバイスを考えた。

7) ワーク報告（15：55～

①学習してよかったこと。②覚えておくこと(私の安全課題)、③支援して欲しいこと。

8) 解散（16：00）

6. 第3回セルフアドボカシー養成講座

開催日 令和元年10月12日（土）

会場 就労継続支援B型事業所

天成舎（国立市）

テーマ：「距離 パーソナルスペース」めあて：*暮らしのルールブックを使用しないテーマにした。

*男女の間柄に限定しないために使用するイラストは棒人間にした。

*ロールプレイを適宜入れていくこととした。

ファシリテーター：福田和弘

（青梅福祉作業所）

進め方 当事者のみテーブルを用意して、ロールプレイをしやすいようにペアで組むことを配慮した席にした。2名に1名のアシスタントとして支援者やコアスタッフを配置した。

保護者やその他参加者は後ろ側に座ってもらい、適宜参加できるようにした。

スマホ・携帯詐欺に ひっかからないために

- 請求せいきゅうのページになったらとにかく閉じる。
- 知り合いしりあひ以外のメールメールはすべて無視する。
返事へんじをしない。
- 登録者どうろくしゅうがい以外のメールメールは受信じゅしんしない設定せっていにする
- おいしい話はなしは疑うたがう
- メール・はがきの費用ひようせいきゅう請求せいきゅうは払はらわない

(1) プログラム

1) 開始挨拶とセルフアドボカシーという言葉の意味 (14:00~)

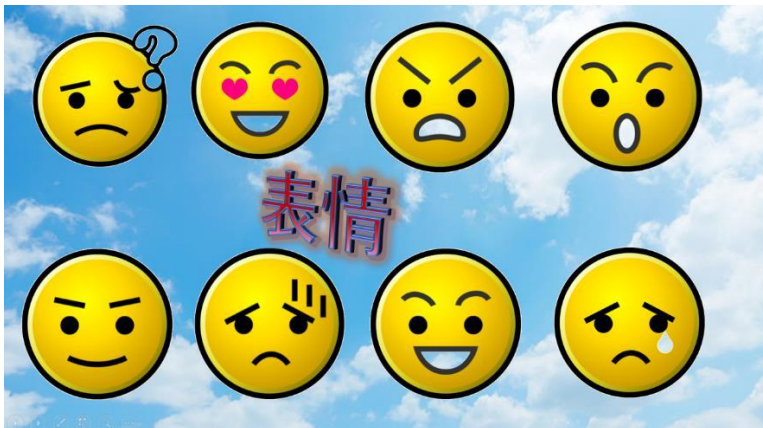
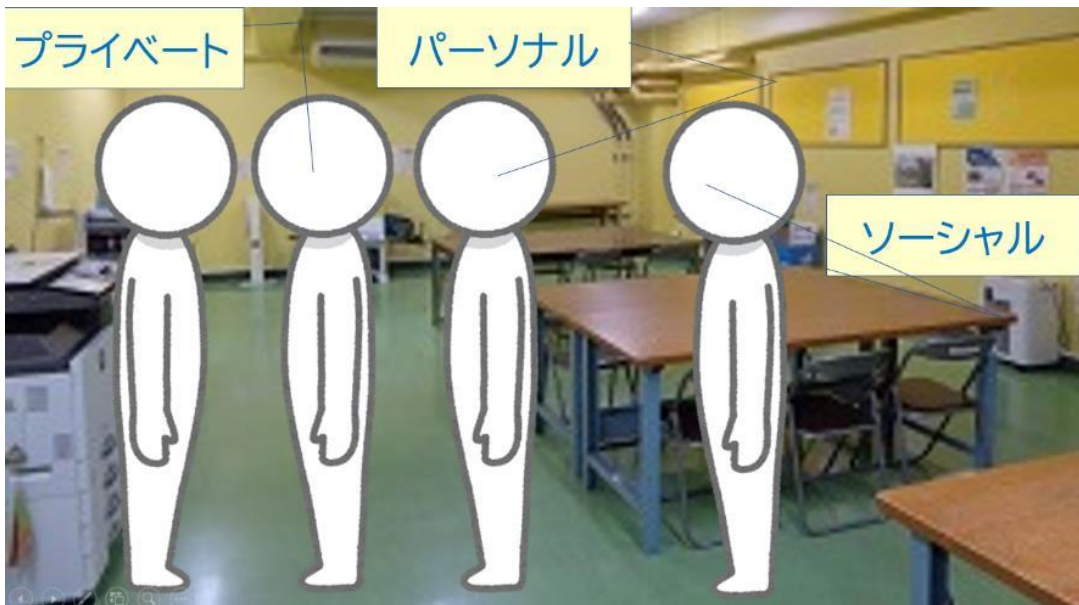
2) 自己紹介 (14:03~)

3) 本日の流れの説明 (14:10~)

4) 全体ワーク (14:15~)



パワーポイントと連動した図柄が入ったワークシートを用意した。記入⇒発言という形をとった。ペアで不快に感じる距離をウレタン棒で測った後にメジャーで距離を測るなど、参加者が実際に動く場面を多く入れた。

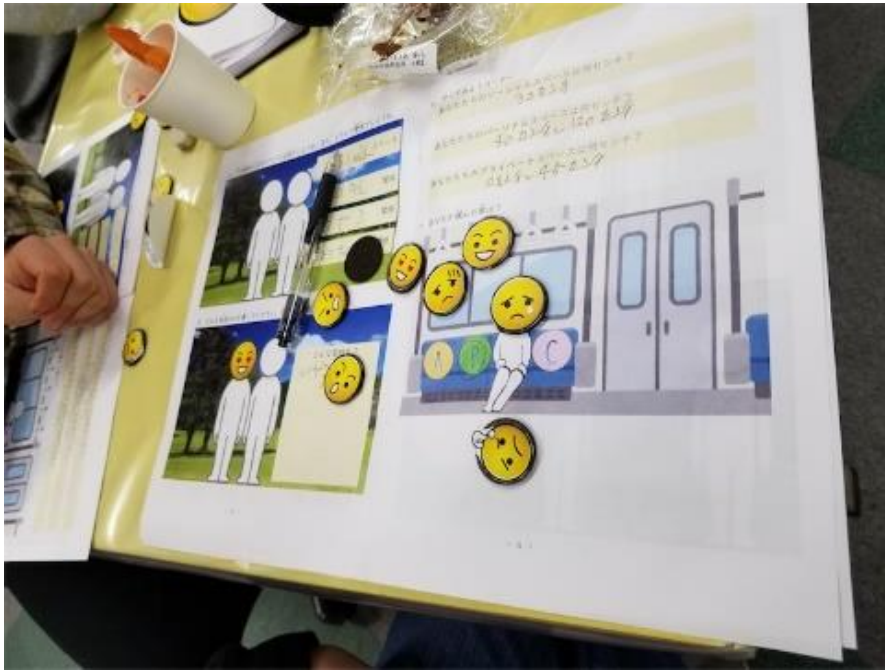


5) 休憩 (15:00~ おやつ・飲み物つき。

6) 全体ワーク (15:20~

7) 次回のテーマの希望を聞く (15:50~

8) 解散 (16:00)



7. 第4回キープセーフ f o r チェンジ講座

開催日 令和2年1月25日(土)

会場 就労継続支援B型事業所
天成舎(国立市)

テーマ:「恋愛」

*「ふれあいの段階と合意」を学び、恋愛力をつけよう!

*「グッドウエイ・モデル」を知る

ファシリテーター:平井 威(明星大学客員教授)

進め方:キープセーフ f o r チェンジの進め方を採用した。また、アセスメントを既定のシートに沿って行った。プロジェクターを使用せず、参加者個々にスケッチブックを用意し、進行に合わせてワークシートを配布した。恋愛をテーマにしたが数回のセッションを想定し、参加者が男女混成であることから今回はセックスまで拡大しないこととした。



(1) プログラム

1) 司会挨拶。
新規参加者の紹介。アイスブレイクでは毛糸ワークをした。並行して支援者にアセスメントの依頼をした。

(14:00~)

(2) 本日のテーマと「プライベートゾ



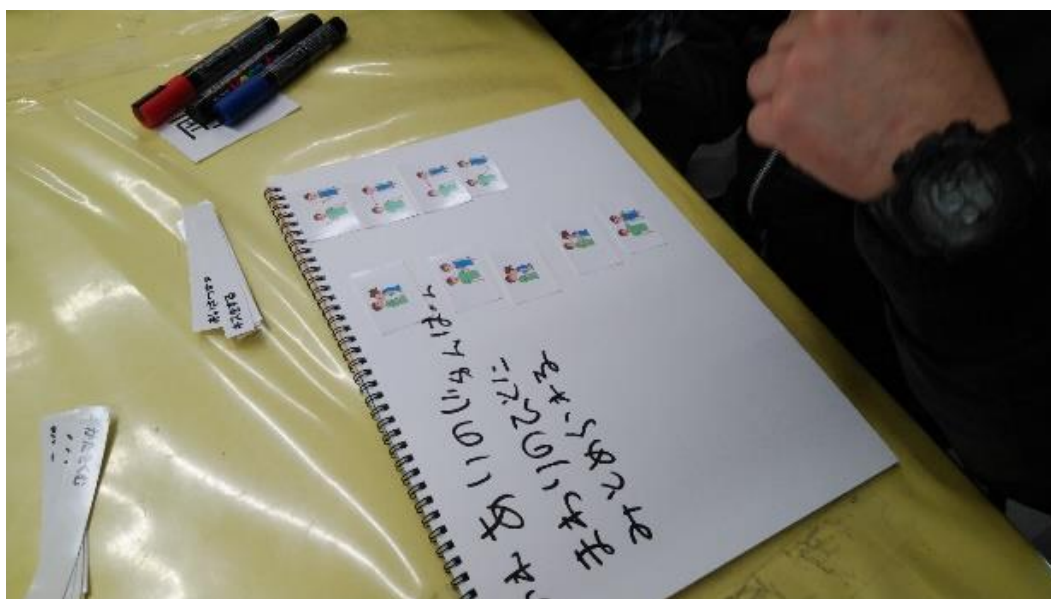
ーンについて」ホワイトボード上棒人形で説明した。(14:10~)

(3) 14:30 「恋愛」について。恋人同士がすることを参加者が自分用のスケッチブックに書いた。(自分がしたいこと・テレビの場面で思いなど)また、恋愛には「失恋」と「結婚」という終わりがあることを学んだ。

1) ふれあいのさまざまな種類が書いてあるカードを恋愛の進み具合で変化するように参加者がスケッチブックに並べて発表し、並べた理由も話してもらった。(14:40~)



2) 「恋愛関係の段階カード(イラストカード)」を参加者それぞれの考え方で並べてもらった。次第に距離が近づく感覚を共有できるようにカードを用意したが、イラストの解釈に幅があったために、参加者から「難しい!」との意見があった。(15:00~)



3) 「4つの合意」を確認した。ふたつのモデル案を提示して、①年齢・②気持ち・③態度・④正気(素面感)について○×で評価してもらった。(15:20~)

4) 15:30 休憩 お菓子と飲み物を提供した。回数を重ねるごとに和やかな時間が広がってきた。

5) 「ストップ・リラックス・考える」を共有するために参加者のリラックス法を聞いた。マッサージ・カラオケ・映画・音楽を聴くなど普段の様子がかがえた。また、どこでも簡単に一人でできる呼吸法を学んだ。(5段階に分けて息を吸う)(15:4

0～

6) 参加者に「分かれ道」のイラストと「4つのルール」の資料を配布して、今後のセッションに使っていくために学んだ。

最後に、スケッチブックに「今日楽しかったこと・わかったこと・次回やりたいこと」を参加者に書いてもらった。

16:00 次回は、3月7日(土)に開催することを告知して解散した。

(4) 参加者の反響と課題

キープセーフ for チェンジの進め方を初めて実施したこと、4回目という事もあり、発言などの熱量が大きく、関心の強い恋愛をテーマにしたこともあって時間を多く費やした。参加者のアンケートにも4つの合意を知ることができてよかった。難しいところもあったけどよかったなど好評で次回への期待度が高かった。

参加者が増えてきて、男性6名、女性5名となっている。進行を円滑にすることや参加者と支援者同士の関係性を深めていくために人数の上限を決めて、ある程度固定していく必要性も感じさせられた。

8. 4回のセッションを終えて

5月から3月まで5回のセッションを開催するスケジュールとなり、回を重ねていく中で参加者が11名に増えた。

最初からの参加者に加えて徐々に増えていったことから、場に慣れていくさまが手に取るようにわかった。4回目を終了して参加当事者は男性が6名、女性が5名であった。

考えて⇒ワークシートに書いて⇒発表して⇒ほかの人の発言も聞いて⇒影響されて⇒考えが発展していくという形ができていた。

セルフアドボカシー支援を考えるにあたり、準備を含める計4回のセッションから、生きづらさを抱えた障害当事者の皆さんが、多く存在することや、自分の意思を伝えることについても、不器用でままならないこと、将来に向けての幸せのイメージを創造しにくいことなど、多くの課題があることがより鮮明になった。また、キープセーフ for チェンジの進め方が有効に働いていたという実感が持てた。

支援者の側から考えると、障害当事者に向けての、より丁寧な説明がなされていないことや、当事者の方々が本当は、何を望んでいるかなど、一緒に考え、寄り添う支援をもっと深く考えていかななくてはならないという課題を与えられた。

当事者の皆さんと支援者が同じグラウンドに立ち、良い関係の中で、お互いを尊敬しあえる時、セルフアドボカシー支援は成立するのだと思う。

多摩TSとしては、これからも、当事者の皆さんと支援者がこのような関係の中で、障害を持つ当事者の皆さんの支援をしていきたいと考えている。

当初予定していた3回のセッションが終了した時点で、4回目ゼミナールのテーマについて参加当事者の皆さんに聞くと積極的に発言があり、4回目をやらないという選択肢もありますよと伝えると、大反対であったことから、学びたい、考えたい、表現したいという自発的な姿勢が育まれていたことを実感し、これまでのセッションがしっかり機能してきたと認識できた。

4回目以降は「恋愛」について学びたいという希望が多数であったので、「恋愛」を軸にさまざまなテーマを設定していけば複数回のセッションが展開できると期待している。

セルフアドボカシー支援に向けたキープセーフ f o r チェンジのセッションは、さまざまなテーマを展開できる可能性に満ちていることから次年度の多摩 T S の活動指針を固めることができた。

沖縄市セルフアドボカシー講座実施の取り組み

◎仲村 利江	社会福祉法人 楓葉の会	地域福祉よろず相談員
◎島 粒希	社会福祉法人 楓葉の会	楓葉館
高江洲夢美	沖縄市障がい者基幹相談支援センター	
喜舎場愛美	沖縄市障がい者基幹相談支援センター	
島 和也	沖縄市障がい者基幹相談支援センター	
富樫 恭平	沖縄県発達障害者支援センター	がじゅまーる
大山 望	学校法人大庭学園	ソーシャルワーク専門学校

はじめに

平成27年度にNPO法人PandA-Jと沖縄県発達障害者支援センターの共催にて開催されたトラブルシューター（以下、TS）養成セミナーを皮切りに、沖縄市TSは、沖縄市障がい者基幹相談支援センターを中心として、地域の特別支援学校、障害者支援施設（生活介護、共同生活援助、就労支援事業所等）、県発達障害者支援センター等、必要に応じたメンバー構成で、知的障害・発達障害をもつ方の地域生活支援および権利擁護のための取り組みに向けた協議・検討を行ってきた。

以前より、地域の弁護士を柱に、沖縄市とうるま市の相談員や地域包括支援センター、行政職員等との勉強会（通称：弁福会）を、2ヶ月に1回の頻度で開催しているが、TSは、そうした一連の活動について共通言語として一定の枠組みを示したものといえる。

これまでの取り組み内容を概観すると、平成28年、29年度は、圏域でのTS養成セミナー（基礎、アドバンス）の開催を通し、TSの役割、必要性についての啓発を行ってきた。平成30年度は、地域の現状として、性課題を持つ知的障害・発達障害を持つ方等への支援について苦手意識を持つ支援者が多く、支援方法が分からない等共通した困り感を持っていることへの課題から、特別支援学校教員、児童系サービス提供事業所職員、委託相談員、計画相談員を対象に①性課題の支援＝権利擁護支援の理解、②支援者自身の自己覚知、③チームアプローチとネットワーク構築の必要性の理解、を目的に、暮らしのルールブック講座等の支援者向け研修を開催した。

啓発を目的とした研修から、具体的な支援の在り方について学ぶ支援者向け研修を通し、今年度より、セルフアドボカシー支援に向けた学習プログラムとして、本人向け講座（キープセーフ講座）の実施を試みた。

沖縄市T Sの活動目的

沖縄市T Sの活動目的は、大きく4つを設定している。

- ① 障害者が地域で安心して暮らしていける支援体制づくり
- ② 障害者の権利を守り、障害者自身がトラブルに巻き込まれないための地域づくり
- ③ 障害者の地域生活支援、権利擁護のための支援者の育成、ネットワークづくり
- ④ 地域T S活動を通しての障がい当事者及び支援者のエンパワー

2019年度の活動実績

- 2019年8月14日 地域連携協議会①
- 2019年8月31日 武蔵野T S検討会
- 2019年9月13日 本人向け講座検討会議
- 2019年9月27日 地域連携協議会②
- 2019年10月11日 本人向け講座検討会議
- 2019年11月6日 地域連携協議会③
- 2019年11月8日 地域連携協議会④（キープセーフ講座学習会）
- 2019年11月20日 キープセーフ講座
- 2019年12月4日 キープセーフ講座
- 2019年12月12日 地域連携協議会⑤
- 2019年12月18日 キープセーフ講座
- 2020年1月15日 キープセーフ講座
- 2020年1月20日 地域連携協議会⑥
- 2020年1月29日 キープセーフ講座

講座を実施してみて

(1) 実施状況

第1回 日時：2019年11月20日（水）16：00～17：00 会場：楓葉の会 グループホーム楓館

テーマ：「人の部屋に勝手に入っていいの？」

- ・スタッフ：メインファシリテーター（1名） サブファシリテーター（3名）
- ・参加者：楓葉の会利用者8名
- ・第1回キープセーフプログラム「人の部屋に勝手に入っていいの？」を楓葉の会グループホーム入所者8名に向けて実施。

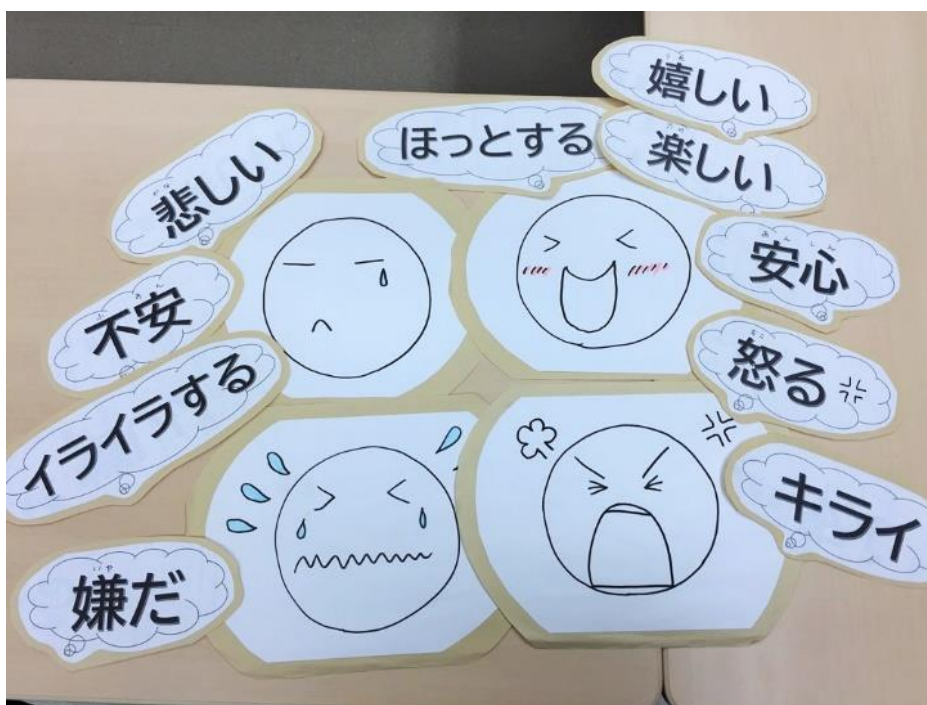


第2回 日時：2019年12月4日（水） 16:00～17:00 会場：楓葉の会 柵momiji

- ・テーマ：「人のものを勝手にとっていいの？」
- ・スタッフ：メインファシリテーター（1名）サブファシリテーター（5名）
- ・参加者：楓葉の会利用者6名
- ・第2回キープセーフプログラム「人のものを勝手にとっていいの？」を楓葉の会グループホーム入所者6名に向けて実施。前は実施会場をグループホームとしたが、生活の場と講座の場を分けることによる反応を確認するため、訓練場所である柵で実施。第1回で言語化に難しさを見せる参加者が多かったため、前半に感情を捉える

ワーク
ク
入。

ワー
を導



第3回 日時：2019年12月18日（水） 16:00～17:00 会場：楓葉の会 椛momiji

- ・テーマ：「人のものを勝手にとっていいの？」
- ・スタッフ：メインファシリテーター（1名） サブファシリテーター（4名）
- ・参加者：楓葉の会利用者6名
- ・第2回のテーマ「人のものを勝手にとっていいの？」を再度、楓葉の会グループホーム入所者6名に向けて実施。
変更点として、シチュエーションを単純化し、場面を明確化、手元の資料を廃し、情報をロールプレイとホワイトボードだけに集約し、認知特性により配慮したプログラムとなるよう試みた。



（2）実施による成果

全5回のセッションを予定しており、うち3回が終了した。セルフアドボカシー講座としてのキープセーフプログラムは、グッドライヴズモデルに基づくものであり、「教える」よりも「考える」ことを重視した内容となっているが、実際に講座を初めてみると、参加者の多くがいかにか普段「教えられる」ことに慣れているかを感じた。プログラムを受けること自体は、参加者にとってはちょっとした「イベント」になっているような印象で、それぞれ楽しみにしてくれているような様子が伺えた。回を重ねるごとにロールプレイや劇仕立ての提示が増えていったが、結果として、①参加者のコミット具合、②シチュエーションの把握、③アバターへの共感性、が高まっているように見える。残り2回のプログラムの中でどれだけの気づきや変化が見られるの

か、引き続き検証を行っていく。



今後の課題

講座実施検討の当初より、対象者についての適用やグルーピング、効果に関する評価について等、実施を通して検証していく必要のある事項が想定された。以下に、地域協議会にてプログラムの評価／検証を行う中で見えてきたいくつかの課題について取り上げる。

(1) 対象者の範囲について

・知的水準

今回の参加者の多くは中等度以上の知的障害をもっており（9名中3名が中等度、4名が重度の知的障害判定）、理由や仮定についての言語化が非常に難しい状況があった。日常生活における定型的な応答であれば対応可能だが、自ら考え、自分の言葉をその場で紡ぎ出すのは相当な困難があると見られた。

・リスクアセスメント

本プログラムは、中～低リスクの対象者を想定したプログラムとして実施しているが、標準化されたリスクアセスメントを実施しておらず、エピソードベースでの判断を行っている。リスク・ニード原則に基づけば、参加者のリスクとプログラムの濃度をマッチングさせる必要があり、効果を検証する際に、信頼性に疑問が残る。

・生活背景（入所、在宅…）の考慮

本講座では、グッドライヴズモデルに基づいたプログラムとして「グッドウェイ／バッドウェイ」「よい家／悪い家」という用語を用いる。しかし、地域生活の経験が少なかったり、自分にとっての「グッドライフ」について考える機会自体の乏しかった

参加者にとってはイメージ抱きにくく、行動を選択する基準として機能しにくい様子が見られた。知的水準の考慮とともに、講座へのレディネス（準備性）の評価や、それを高めるための、プログラム実施に向けた事前の働きかけの必要性も課題として見られた。

（２）プログラムの組み立てについて

本講座のテーマは「暮らしのルールブック講座」のを題材にしつつ、実際に参加者が課題として持っている話題をテーマとして扱ったが、キープセーフプログラムで扱うテーマとして適当なものとしてでないものの判断の基準がなく、「リスク・ニード原則」と併せ、参加者にとって効果的なテーマの選定が難しいと感じた。

また、今回の参加者の属性と、第3回までのセッションの様子を鑑みると、本講座の構造について、中等度以上の知的障害者に対しては、一定程度のカスタマイズが必要になる可能性が示唆された。例えば、グループセッションという性質上、参加者はそれぞれ他の参加者の意見を聞くことになるが、言語化できる方とそうでない方の差が大きい場合、迎合との見極めが難しくなることや、他者視点の獲得の難しい方の場合、より直接的な体験的理解を通して、場面をイメージできるよう工夫していく必要が見られた。地域協議会での検証の中では、個別セッションの実施の可能性も、アイデアとして提示された。

（３）地域での普及に向けた取り組みについて

最後に、本講座の地域での普及に向けた取り組みに関する課題と展望として、講座を実施するファシリテータに求められるスキルについて整理する必要がある。オリジナルの危機介入支援プログラム *keep safe* は、インストラクターの資格が要件として課されているが、その一部要素を取り入れた本講座においても、どこまでが支援者個人の技量で、どの部分がプログラムの要素なのかが明確でなく、地域の支援者に発信していく際には、プログラムの骨子を明確化すると同時に、実施者に求められる知識・スキルについても整理しておく必要がある。特に、誘導や迎合につながらないセッションの促し方や、障害特性・個別性への配慮のための知識、具体的な工夫について、まとめておく必要がある。

また、講座による効果に関して、彼らの犯罪（加害／被害）のリスクの低減はもとより、セルフアドボカシーの観点から見れば、当事者自身がいかに自ら考え、発信（言語／非言語）できるようになったかを可視化する手立ても重要となる。そうした変化を捉えるための指標を検討していくことが必要と感じる。

本講座は全5回のセッションであるが、ご本人のセルフアドボカシーを高めるための取り組み、本人向け講座の在り方について、実践を通じた検討は引き続き取り組んでいくつもりである。現在行っている講座では、セッションの振り返りも手探りのなか、それぞれが気づいた点について自由に意見を出し合いながら、プログラムの効果と意義について検証しつつ、修正を試みているところである。講座終了後、参加者に

対するフォローアップも含め、試行錯誤的に実践しつつ、一定の枠組みを示すことができると考えている。

全国ブロック地域連携協議会

全国事務局：東京武蔵野TS

武蔵野TSキックオフ&全国TS交流

セルフアドボカシー支援学習プログラム紹介

- ◎奥田眞 武蔵野TS 多摩TS 東日本少年矯正医療・教育センター教育専門官
◎堀江まゆみ NPO法人PandA-J代表 白梅学園大学教授
◎平井威 多摩TS 明星大学客員教授

はじめに

東京都内には独自の活動を展開しているトラブルシューター・ネットワークが4つあるが、当事者のトラブル修復支援プログラムを実施した経験は多摩TSだけであった。東西に長い東京の中で中央にあたる山の手地域のニーズにこたえられていない状況に鑑み、新宿・杉並・中野・武蔵野・三鷹・府中・小金井エリアでのネットワークづくりを目指して啓発的・支援者向けセミナーを開催した。

また、昨年度から取り組んできた地域TSベースにおける知的障害・発達障害のある人のトラブル・触法へのセルフアドボカシー支援と危機介入支援の経過と成果を交流し、令和元年度の委託研究をより加速させる契機にしたいと企画した。

参加者は、当該地域の障害福祉事業所関係者（職員等）16

武蔵野エリアTS

知的障害・発達障害のある人のトラブル・触法への地域包括支援を考える
—セルフアドボカシー生涯学習と危機介入支援から—

日時 2019年9月1日(土) 13:00~17:00 (12:30開場)

会場 大会議室 Natuluck 吉祥寺北口 ハロススペース

対象 福祉支援者、保護者、教員 他関係者

定員 50名

プログラム

TS(トラブルシューターネットワーク)活動とは、「生きづらさを感じている知的障害・発達障害のある本人の支援」を地域ベースと多職種連携ベースで進めていこうとする「地域支援力向上の基盤整備」の包括的活動です。

東京・武蔵野エリアTSでめざすこと
堀江 まゆみ(NPO法人PandA-J 白梅学園大学) 宮根 恭平(中崎TS、冲崎発達障害者支援センター)

講演 I 弁護士とともに 地域でのTS支援を考える
松原 拓郎 (多摩バリアック法律事務所)
10月から吉祥寺拠点の事務所を開設します。障害のある人の刑事弁護など、どんな活動を展開するか、お聞きします。

講演 II 精神科医とともに 地域でのTS支援を考える
樹屋 二郎 (東京歯科大学、こどものこころ診療部門)
7月から「こどものこころ診療部門」を始めました。発達障害のある子・人等の支援についてお聞きします。

性問題行動リスクのある思春期・成人期の本人を「地域で支援し続ける」ために
—SOTSEC-ID、KeepSafe プログラムの実践から—

SOTSEC-ID: 新潟TS 竹田 一光(基幹相談支援)・小出 薫(弁護士)
多摩TS 平井 威(明星大学)・奥田 眞(法務教官)
KeepSafe: 名古屋児相 橋本 佳子(児童相談所常勤弁護士)
福岡TS 長原 康紀(母子児発達障害者支援センター)

2019-2020 無料実施
武蔵野エリアTSに参加・協力下さる方・団体に(地域包括型)

セルフ・アドボカシー講座
本人・支援者向けの講座を出張します

性問題アプローチ
Keep Safeプログラムへ参加できます

事例・検討・相談
定例の検討会を開きます

PandA キャンパーン隊
親・当事者TSの啓発隊が学校等に出張します

名、特別支援学校教職員等教育関係者16名に加えて、静岡県から7名の福祉・教育関係者が参加した他、岩手、新潟、神奈川、愛知、沖縄のTS関係者と情報取材のために国立障害者リハビリセンター（発達障害情報・支援センター）や報道（NHK解説委員）関係者など合わせて55名であった。司会・進行は奥田が務めた。

内容1 発達障害を抱えた人のトラブル・触法に対して医療は何をできるのか～セルフアドボカシー実現のために、発達とトラウマの視点から考える～

梶屋二郎氏 東京医科大学

少年院勤務経験のある梶屋氏は、冒頭発達障害と非行・犯罪の関係について、「加害者よりも7倍も被害者になりやすい」というエビデンスを紹介したうえで「適切な支援を受けられていない発達障害者は（非行・犯罪の）危険因子となる場合がある」と述べた。

さらに虐待や災害などによるトラウマ反応と発達障害特性の類似と非行化に関する知見を述べたうえで、対象者のアセスメントの重要性に触れ、WHO提唱のバイオ・サイコ・ソーシャルモデルにもとづく問題行動の見立てとそれに対応したTSのようなネットワーク型支援の重要性を指摘した。

内容2 弁護士とともに地域でのTS支援を考える 弁護士 松原拓郎

弁護士会が運営する多摩パブリック法律事務所で働いていた松原氏は、担当した“障害”と搾取・虐待／浪費／加害等をめぐり重篤化してしまった事件を振り返り、事案化する前の支援や司法と福祉・医療・教育等と連携の必要性について具体的事例を挙げて語った。

そのうえで、トラブルシューターの役割は刑事事件の「更生支援」に限られず、あくまでも支援のつながりの一部であることを強調した。

内容3 名古屋TSと盛岡TSにおけるKeep Safeプログラムの実施

名古屋市中央児童相談所 橋本佳子氏、岩手県発達障害支援センター 長葭康紀氏

名古屋市児童相談所における障害児施設と連携した「キープセーフ・プログラム」（全38回／毎週1時間）実施の経過報告と、盛岡発達障害支援センターを中心とする盛岡・仙台TSによる「キープセーフ・プログラム」（全18回、保護者セッション含む／隔週2時間）実施の経過報告があった。

「キープセーフ・プログラム」は、Good Wayモデル（ニュージーランドWell Stop）にもとづきイギリス・ケント大学の教授らが開発した青少年向けySOTSEC-IDプログラムであり、昨年度からイギリスと日本（堀江）との共同研究が始まっている。この研究の一環として名古屋（5月）と盛岡（6月）でいち早く当事者向けセッションが開始された。

どちらも対象となる当事者は3名ずつの最少人数で開催している。この段階ではまだ始まったばかりであることから、主に準備過程について報告された。セッションづくりについては、以下の3点が必須であることが示された。

1. 心理士や福祉士、教師など心理教育的介入に関する専門家による教材や展開案の作成
2. 関係機関の他職種連携による数名から10名程度のコアグループによる協同
3. 当事者を取り巻く支援者間のコミュニケーションとリスクマネジメント



内容4 セルフアドボカシー支援に向けた学習プログラム開発

白梅学園大学 堀江まゆみ、明星大学 平井 威

Keep Safeのエッセンスを生かし、より汎用性のあるセルフアドボカシー支援プログラムを開発していることを紹介した。このプログラムが採用するグッドウェイ・モデルはエニーランドによれば(L. Ayl and@wellstop.org.nz)、以下の6点の特徴をもっている。

1. ニーズ対応：個人のニーズに合わせたプログラム
2. バイオ・サイコ・ソーシャルモデルの介入：社会的および文化的背景を考慮し生活まるごと捉える
3. 発達のアプローチ：トラウマ、虐待、ネグレクトにも対処
4. 責任主体：メンバーは、他人の虐待や危害に対する責任がある
5. ストレンクス基盤：メンバー、家族、システムの強みを重視
6. 汎用性：定型発達の子供や若者にも使用可能

知的・発達障がいのある若者のための

セルフ・アドボカシー講座 キープセーフ FC(仮) 開発

トラブルを起こしたり罪に問われたりしがちな人が、自分の問題と向き合い真つ当な生き方を選択できるようになるためには、自分にも豊かな人生が切り開けると言う「将来への希望」や、ありのままの自分が他人に受け入れられるという「受容的体験」と、誰かの役に立ち誰かに喜ばれるという「愛他的体験」が必要。その後、問題を改善するための具体的スキルを身につける努力が続く。

1 自分の「分身」であるアバターを作り任意の名前をつける

このことは、問題を一旦「外在化」して、客観的に見つめることを可能とする。また自分の体験に直面化されることによる回避衝動を抑えることで、学びへの意欲を維持することができる。

2 学習者は、賢者（賢者は正直、熟考、利他的という3つの徳を備えています）となって、アバターに「悪魔のささやき」に変わるアドバイスをすることで、問題解決スキルを学習していく。

3 最後にキープセーフ・プラン（安全支援計画）を含む「私のグッドライフ・プラン（個別の支援計画）を作る。



内容5 各地の地域連携協議会をどう活用し、広げていくか（作戦会議）

新潟市西基幹相談センター 竹田一光氏

沖縄県発達障害者支援センター 富樫恭平氏

竹田氏はすでにS
O T S E C - I D 3
0回セッションに取り
組んだ実績のある
新潟TSによる地域
活動支援センターを
会場とした障害当事
者対象の公開勉強会
をはじめとする多角
的な研修について報
告した。

またそうした取り
組みを進めるTSネ
ットワークを基盤と
した生涯学習地域連

TS活動の3階層

<第3階層> 個人におけるTS活動

- ・ パーソナライズされたプログラムの提供
- ・ 司法場面における危機介入支援

<第2階層> 地域におけるTS活動

- ・ 地域住民への啓発・理解促進
- ・ 支援ネットワークづくり（予防的介入）

<第1階層> 社会におけるTS活動

- ・ 各領域（司法・福祉・教育等）の連携体制
- ・ 各種ガイドライン作成、事業化等

携協会のあり方について、「思いのある個人に留まらず、障がい福祉事業所・障がい者基幹相談支援センター・地域生活定着支援センターなどの既存組織での本来事業への組み込み、障がい者地域自立支援協会などの既存の地域ネットワークに、フォーマルに広めていく方法を常に意識して実施方法を模索していきたい」と結んだ。（詳しくは、新潟TS報告項を参照のこと。）富樫氏は、沖縄TSの取り組みから「TS活動の3階層」で構想し、トラブルシューターの育成のために「多分野・多領域合同研修の企画・開催、問題の解消をねらいとした支援プログラムに加え、グッドライブモデルに着目した支援プログラムの開発・検討およびその技術講習の実施、アセスメント技術研修の企画・開催、地域包括的な支援体制づくりに向けた、地域評価・地域分析の実施、既存事業の機能と役割の整理と活用、権利擁護、意思決定支援、差別解消等に関する事業とのタイアップ／連携」などの課題を提起した。

全国地域連携協議会

全国事務局 東京杉並 TS

杉並TSキックオフ「生きづらさを抱えた知的・発達障がいのある人を地域で支え、エンカレッジするために」

- ◎松浦 隆太郎 一般社団法人ふれジョブ理事 元杉並区立済美養護学校長
◎堀江 まゆみ NPO法人PandA-J代表 白梅学園大学教授
◎平井 威 多摩TS 明星大学客員教授

はじめに

2019年9月1日の武蔵野TSセミナーに集まった杉並区関係者の間で、「杉並区にもTSネットワークをつくりたい」という声があがり、11月2日の発足会が企画された。区立済美教育センターの相談員や区内にある大学の教員ら20数名が参加し、TS基礎講座の内容で実施された。

内容1 トラブル的知的・発達障害者が地域で暮らしていくために私たちが出来ること

白梅学園大学教授 堀江まゆみ

地域に暮らす知的・発達障害をめぐるトラブルの実情と課題を明らかにし、地域包括的支援の必要性とそのためネットワークのあり方について問題提起した。

特に、障害当事者のレジリエンスを高める意義と方法について掘り下げ、そのためのアプローチの一つとして、「セルフアドボカシー講座キープセーフFC」を紹介

杉並トラブル・シューター(TS)ネット発足へ！
生きづらさを抱えた知的・発達障がいのある人を地域で支え、エンカレッジするために

11/2(土)
13:30~17:30
高井戸地域区民センター
京王井の原線高井戸駅北口すぐ

トラブル・シューター(TS)ネットとは、障がいのある人を助けるための事を解決する人たちのつながり。経験知識を踏まえて助けづくりを進める「ふれジョブ」とは相互補完の関係から生まれません。福祉、教育、司法、医療、そして障がいのある人だけでなく、作りませんか？ 障がいのある人を支えるネットワークを。

発起人：元杉並区立済美養護学校長、一般社団法人「ふれジョブ」理事 松浦隆太郎

お話しする人
白梅学園大学教授 NPO法人PandA-J 代表 堀江まゆみ
知的障害のある人の監法ケースへの対応 井の原法律事務所 弁護士 松原祐郎

杉並TSネットワークのイメージ
リスクアセスメント 事例検討 司法後援
当事者 KeepSafe・セルフアドボカシー講座 全国TS他地域TSとの連携
共同研究 研究発表 コアメンバー 参加者会
ファシリテーター養成 プログラム作成グループ

知的・発達障害のある人のセルフアドボカシー講座の作り方 明星大学客員教授・明治大学兼任講師・多摩TS 平井威

申込みは、お名前とご所属(ご本人様とご関係)をお書きの上、メールかファックスでお申し込み。
〆切10月31日

申込先 メール info-panda-j@shiraume.ac.jp NPO法人 PandA-J's
FAX 042-349-7373 Protection & Advocacy Japan

介した。

内容② 知的障害のある人の触法ケースへの対応 井の頭法律事務所 弁護士 松原拓郎

この秋に新しく地元で法律事務所を開設した松原氏は、知的障害の触法ケースについて、どのように刑事弁護したか、地域で支えるための課題は何か等事例を挙げて紹介した。そのうえで、トラブルシューターの役割は刑事事件の「更生支援」に限らず、地域の中で暮らし続けるための支援であるべきことを強調した。

内容③ 知的・発達障害のある人のセルフアドボカシー講座の作り方

明星大学客員教授・明治大学兼任講師 平井威

「セルフアドボカシー講座キープセーフFC」の教材紹介とその中のいくつかの要素を取り上げた。「キープセーフFC」の核心的概念である「グッドサイド／バッドサイド」の考え方と対立する心の声の代弁者である「3人の悪者」と「3人の賢者」のロールプレイングや、「分かれ道に立つ男」とそこで活用されるチルスキル＝冷静になるための個に応じた対処法について参加者とともに演習した。

今後の展望 「キープセーフFC」のインストラクター養成のためのセミナーを2020年3月8日に開催することを準備している。

甲信越北陸中部ブロック地域連携協議会

滋賀 TS

Keep Safe for チェンジ 研修会

滋賀セルフアドボカシー講座（支援者対象）

2020年2月21日支援者向け研修会 講師：堀江まゆみ氏 橋本佳子氏

- テーマ「本人の自己肯定感・自己発信力を高めていく支援」

小児逆境体験や色々な社会環境の中で、本人の思いを上手く伝えられずに、青年期・成人移行期になり、社会逸脱行動（窃盗・万引き）、対人トラブル（性依存）、金銭トラブルを起こし、ひとときの快樂に走ってしまい傾向がある。人との境界の曖昧さや、感情調整ができず生きづらさを感じている本人の自己発信力、サポート付き意思決定プロセスが高めていければと考え、このようなテーマを設定した。

- 会場：滋賀県甲賀合同庁舎
- 日程：午前10：00前後～12：00は、アセスメントの時間（対象支援者さんたちにどんな内容でプログラムを組むのが良いか考える時間）。堀江生よりコンサルテーション。午後13：00～17：00 支援者向けの研修

本事業の成果—当事者 TS からの評価から

当事者の変化



Aさん



- 当初周囲の発言に追随していたが、後に率先して発言するようになる
- 他のメンバーを配慮した行動がとれるようになる

Bさん



- 自分の話を聞いた相手の認知を気にかける場面が増えた
- 他のメンバーの発言を待つ、受け止める、といった行動も出てきた

Cさん



- 筆談だが、とにかく説明の分量が増えた
- 自尊心の向上、対人関係機能の向上が顕著であった

- ① 参加者のコミット具合
- ② シチュエーションの把握
- ③ アバターへの共感性



「教えられる」

から

「自分で考える」

へ

全体総括

令和元年度の成果と次年度へ向けて

堀江 まゆみ ©NP0 法人 PandA-J 代表 白梅学園大学教授

《今後の展望—令和2年度の計画》

生きづらさをかかえる障害当事者がセルフアドボカシー生涯学習を適宜受けられる地域ネット基盤をつくるために

1. 《Keep Safe》および「キープセーフ FC」プログラムを全国に広げるための全国 TS ネットワーク（全国・地域連携協議会）のブロック整備および責任体制

全国 TS 代表 1 名と東西の共同運営委員長 2 名、事務局長 1 名によるトロイカ体制とし、各地のニーズに応じた迅速かつ適切な意思決定・執行を可能とする。事務局には他に 3 名の事務局員を配置する。

2019 年度稼働した地域 TS ネットの代表者を核とした地区ブロックごとに計画的な事業実施を図る。北海道ブロック（石狩 TS）、東北ブロック（盛岡 TS）、甲信越北陸ブロック（新潟 TS）、関東東海ブロック（武蔵野 TS）、九州ブロック（熊本 TS）。

関西・中国・四国エリアの TS は 2019 年度実質的な動きがなかったため、西日本ブロック運営委員長のもと、徳島 TS、香川 TS、広島 TS など実行可能なところから着手する。また滋賀エリアは便宜上東日本運営委員長管轄とし、千葉エリアでの計画ともども計画化する。

また児童相談所における実践に関しては地域ベースの TS とは別に、名古屋市児相のキーパーソンを核として児童相談所ブロックとして一括する。

以上により全国連携協議会メンバーは 25 名ほどで構成する。

2. 《Keep Safe》および「キープセーフ FC」プログラム当事者向けセッション—セルフアドボカシー支援講座の開催計画

- ① 《Keep Safe》正規プログラム（アルファベットは通し番号）
 - A. 2020 年 5 月～ 熊本 TS にて医療機関と連携したプログラム実施。
 - B. 開始時期未定 首都圏にて地域ベースのプログラム実施（予定）
 - C. 開始時期未定 児童相談所ベースのプログラム実施（予定）
- ② 「キープセーフ FC」プログラム

- D. 「石狩大地の会」での継続実施（石狩 TS）
- E. 地域活動支援センター「えみな」での継続実施（石狩 TS）
- F. 地域活動支援センター「アンナプルナ」での継続実施（札幌市、石狩 TS）
- G. 岩手県発達障がい者支援センターの事業と連動した県内での実施（盛岡 TS）
- H. 新潟市西区での実施（新潟 TS、基幹相談支援センター西と連携）
- I. 地域活動支援センター「ピース」（基幹相談支援センター西と自立支援協議会相談支援会連絡権利擁護班バックアップ）による新潟市西蒲区での実施（新潟 TS）
- J. 就労継続支援 B 型事業所（基幹相談支援センター西、自立支援協議会相談支援連絡会権利擁護班バックアップ）による新潟市江南区での実施（新潟 TS）
- K. 触法障害者支援経験のある就労継続支援 B 型事業所（基幹相談支援センター西、自立支援協議会相談支援連絡会権利擁護班バックアップ）による新潟市中央区での実施（新潟 TS）
- L. 2020 年 5 月～ 就労継続支援 B 型事業所「天成舎」での継続実施（多摩 TS）
- M. 福岡県における実施
- N. 熊本県における実施
- O. 長崎市における実施

以上 15カ所の実施が計画中であるが、以下に述べる地域 TS 基礎講座（基盤整備）開催地においても態勢が整い次第、当事者向けセッションの準備に着手する可能性がある。

しかし、本委託研究事業は 2020 年度で一区切りとなるため、今後の継続的な生涯学習事業とするためには、安定した事業実施ファンドや補助金交付制度の構築や自立支援協議会・基幹相談支援センター・発達障害者支援センター・地域活動支援センターなど既存の福祉機関事業に位置付けたり、公民館事業や県民大学（市民講座）、あるいは民間学習事業などに講座を設けたりする仕組み作りが課題となる。現状では、本委託研究事業はそうした仕組みづくりのノウハウを構築するまでに至っていないため、新たな研究事業が興されることが望ましい。

3. 各地の TS 基盤を増やしていく（TS セミナーの開催など）計画 並びに《Keep Safe》および「キープセーフ FC」インストラクター養成（2019 年度と合わせて 1000 名を目指す）

① 新たな地域 TS でのセミナー開催

仙台、新潟県柏崎、長岡、佐渡、十日町・魚沼、滋賀、千葉、静岡、福井、広島、熊本、大分、福岡、長崎、徳島、香川、鹿児島などで開催準備が進んでいる。

② 上記セミナーのうち、アドバンスコース（基礎コース実施済の地域で行うセミナーに「キープセーフ FC」インストラクター養成講座を組み入れることが可能である。

《Keep Safe》正規インストラクター養成のための二日間研修に関しては、現時点（2020 年 2 月初旬）では《Keep Safe》そのものの実施予定が少ないため、未定である。

4. 《Keep Safe》および「キープセーフFC」の効果測定、テキストの作成・出版および研究成果の発表

① 《Keep Safe》プログラムによる当事者・保護者の変容と効果に関する研究成果のまとめと発表をおこなう。

2019年度に実施した盛岡、名古屋での実践をまとめて、2020年中に開催される日本発達障害学会、日本児童虐待防止学会等学会での研究発表を行う。

2020年度実施の熊本他の実践に関しては、2020年度以降の学会等発表を目指す。

② 「キープセーフFC」テキストの作成・出版と実施成果の発表

各地での実践を踏まえて、どこでも実施できるための当事者向けワークブックを含むテキストを作成し上梓する。

また、実施成果をまとめ、学会等で発表する。